

---

# カミノツガイ

黒月古城

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カミノツガイ

### 【Nコード】

N9568S

### 【作者名】

黒月古城

### 【あらすじ】

ゴッドイーター。神を喰らうもの。救う神などいないこの世界で、主人公・神無月は新たな可能性を見つけ出す。

パラレルムーンシリーズ第2作、ゴッドイーターの2次創作です。オリキャラしか出ませんww擬人化モノなので、苦手な人は見ないほうがいいかと。

## 神無月（前書き）

少年は戦う。何故か。それが生き残る術だから。戦いに疲れた少年の前に降り立ったのは、神殺し殺しの名を持つ少女だった。

## 神無月

小生は神無月。職業、ゴッドイーター。まあ初めての人はなに言ってるんだこいつとか言われそうなんで下からカンタンに解説していくことにしようか。

突如としてこの世界に現れた謎の生命体・「アラガミ」。その正体は単細胞生物である「オラクル細胞」の集まりである。その強固でしなやかな細胞結合は従来の武器では傷一つ点けることもままならない。そしてアラガミはあらゆるもの（無機物から人間まで）を捕食し、驚異的な速度で進化を続ける。その恐ろしいまでの力を持つ絶対の捕食者を人々は極東地域に伝来する八百万の神々に喩え、アラガミと呼んだのである。

倒す方法はただ一つ、同じオラクル細胞を人間の身体に埋め込み、そしてなおかつオラクル細胞から作られた生体武器、「神機」を使ってその細胞結合を断ち切るしかない。人々は神機を使ってアラガミと戦うものたちを畏怖を込めてこう呼んだ。

「ゴッドイーター」と。

「今日のメインターゲットはシユウだ。お前からすれば雑魚なんだろうが、先日新人と付き添いのベテランが何故かボコボコにされたらしい。そいつらによるとあそこには何らかのイレギュラーが潜んでいたとのことだ。止めを刺す寸前、黒いものが自分たちを攻撃してきて、応戦しながら引くしかなかったらしい。聞く限り相当な戦闘能力の持ち主だ。サブミッションとしてそのアンノウンの調査も含まれてる」

「いいところで横槍が入られたってか？アラガミだったら探知に引っかかってるはずだがなあ？」

「それがまた不快なことだな。探知に引っかからないほど小さくて、挙句ベテラン一人を防戦一方にできるほどの戦闘能力…どれにしろ、侮るんじゃないぞ？」

「誰に向かって物言ってたんだ、って言ってみたい気がするが、若干のフラグ臭がするんでやめておこう。じゃあ行ってくる、カフェオレの配給取っといってくれよ？」

今しがたへりから降りたのは小生、神無月だ。今まで喋ってた奴はコウキ、小生の戦友だ。ゴッドイーターでありながら豊富な化学的な知識を使っていくつもの対アラガミ兵器やその他もろもろを手がけてきた、いわば天才化学者である。ところで本業のゴッドイーターとしての腕では…ココで言わぬが花というものだろう。

今回の小生の仕事は「鳥神・シユウ」の討伐任務である。吸血鬼の

ような恐ろしげな顔、3メートル近い大きな人型の体躯、背中からは腕に羽がついたような翼が生えていて、もっぱらこの翼を使って攻撃してくる。翼についている手のような器官から火球を放ってきたり、地面すれすれに滑空して突進してきたりと実に芸達者である。

それでもアラガミとしては小さいほうだが、先ほどの会話にもあったとおりイレギュラーもいるらしい。今までかなりの数のアラガミを討伐してきたが、新種といわれるアラガミと一戦交えるのは初めてではなかった。もし新種なら、倒せないまでもデータを持ち帰り、更なる対策を練るだけだ。

終わりのない戦いなど存在はしない。だが、それが自分の生きているうちに実現するかどうかは別だ。小生の生きているうちは終わることはなさそうだな。そんな冷めた感情で今日も任務へ向かう。

贖罪の街。かつて人類が栄えていた栄光の影もなく、その町には人っ子一人いない。ビルの一部はアラガミの捕食で削り取られ崩壊し、街の建物は全て廃墟と化していた。町の中心にはもうすでに祈る人もいない協会が、ひっそりと。神に矛盾を訴え続けている

小型のアラガミが大型のアラガミの死骸に群がって捕食をしている。アラガミはこうやって他者を取り込み、その情報を元に進化していく。それは人間の作った兵器も例外でなく、ミサイルを放つアラガミも存在している。地上の植物の大部分がアラガミに食い尽くされてしまった今でも空気中の成分が変わらないのは、植物を食べたア

ラガミがその性質をとりこみ、光合成をしているからである。

ゴッドイーターになりたてのとき聞いた講義の内容が頭に浮かんた。倒したアラガミもそのままにしておくかと雲散し、また新たな固体を形作る。完全にアラガミの機能を停止させる方法は、彼らの脳に当たる神経細胞の塊、通称「コア」を摘出することで、完全にアラガミを葬ることが出来る。それが神機使い、ゴッドイーターの仕事の一つだ。

自分の神機を銃形態に変形させる。幸い気づかれてはいない。群がっている小型アラガミ、「オウガテイル」に照準を合わせ、火炎弾を一匹に打ち込む。銃声とともに打たれたオウガテイルが倒れ、それに気づいたほかの固体がこちらに視線を向ける。やつらが戦闘体制にはいる前に接近、神機を剣形態に変形させ、きりもみ水平切りで足を攻撃し立てないようにする。

そして完全に機能停止するまで切り続けた。抵抗するスキは与えない。一瞬の油断が命取り、それを身を持って経験し続けてきた。ぐったりと倒れ、動かなくなってしまったアラガミ。そうして小生は神機を捕食形態に移行する。神機から邪悪な形をした捕食機関がずるずると姿を現す。そして勢い良くアラガミの軀に喰らいつき、アラガミを捕食した。

この世界は。イカれてしまったこの世界は、小生たちに何を望んでいるのだろうか。そんなことを考えていたとき、この物語は動き出した。

## 神無月（後書き）

何で今更ゴッドイーターなんやっていわれましてもねえ…

高校時代に友人と小生を元にした2次同じような2次創作を書いて  
たんです。当時はカーなりつたなかったんですが、今回でリヴェン  
ジ、というわけでさアww

なにとぞよろしくおねげしますだ

## ゴッドイーターとしての腕前（前書き）

次回作出るのかなあ…ゴッドイーター…出たらいいのになあ…

## ゴッドイーターとしての腕前

上空から奇怪な鳴き声をあげながら鳥神・シユウが小生の前に下りてきた。ご丁寧にかかって来いと指をクイクイしてきやがる。はなからそのつもりだったが、全力で叩き潰す。

手始めにシユウは翼の掌から火球を放ってきた。若干の追尾性能があるので、ここはおとなしく神機を防御形態に移行する。小生が使っているシールドはタワーシールド・ユミル。シールドの中で最も大きく、防御力が高いものだ。その分展開が遅いが、経験豊富な小生にはそれは苦にならない。大概の攻撃は先読みできる。

「この程度かよお！！シユウ！！」

きりもみ水平切りで接近、足を狙って攻撃する。ロングブレード・クロノサイズがシユウの足のオラクル細胞を切り裂いていく。

ウオオオオ！！

「しまっ……」

きつた瞬間にシユウは高速回転し、小生を弾き飛ばした。受身を取り、大事は免れる。

「（クソツタレ……たかがシユウの分際でいい度胸じゃねえか……）」

懐からスタングレネードを取り出す。いわゆる閃光弾だ。対アラガミ用のそのアイテムは今まで数々の窮地を救ってきてくれた。地面に叩きつけて破裂させ、隙を作る。

シユウが目を覆い、怯む。アラガミの中でもシユウ種はスタングレネードの効果時間が長いことが知られている。一回捕食するには十分すぎる時間だ。先ほどと同じように神機を捕食形態に移行する。

「食いちぎれ!!」

獰猛なその捕食器官がシユウの体の一部を食いちぎる。その力を神機を通して小生が受け取る。こうすることでゴッドイーターは身体能力が飛躍的に上昇させることができる。そして食いちぎったアラガミの力の一部として、アラガミバレットといわれる強力な弾丸を手に入れることが出来るのだ。

後ろに下がり、神機を銃形態に変形させる。ジャンプし、シユウの頭に向かって照準を合わせる。

「くたばりやがれ!」

手に入れたバレットが無くなるまで打ち続ける。小生の戦う前に戦っていたベテランがつけた傷が、癒えていなかったらしい。あっけなくシユウは膝を突き、もう虫の息だ。

「せいぜい地獄に落ちないようにカミサマにでも祈ってな。まあ無理な相談だろうがな!!」

ロングブレードに備わる特殊攻撃、インパルスエッジでシユウの頭を粉々に砕く。返り血が小生のスイーパープラン（純白のロングコート）を濡らす。最近の繊維技術もすごいもので、アラガミの返り血を浴びても一度選択すればきれいさっぱり落ちるのだ。そこんとは問題ない。

「あつけねーなあ…探索任務もしないと上官怒るだろうしなあ…世知辛いなあ…」

そついつて捕食する。…それほどいい素材も手に入らなかった。本当に、世知辛い。

ズガアアアアアン！！

「どうわあ？！？！なんじゃいなんじゃい？！」

すぐ近くで大爆発。えらいこっちゃえらいこっちゃ！！（汗）

## 黒い少女（前書き）

やっと本題の擬人化登場人物が出てきます。ちなみに神無月の容姿は

髪 一方通行

トップス スーパープラン

ボトムス 一方通行

どうみてもいっぱいさんですどうも本当にありがとうございます

## 黒い少女

爆発音は街の奥のほうから聞こえた。本当なら早く帰ってお氣に入りのサイトの更新をチェックし、小説進めたいと思ってたのだが…アンノウンの調査って任務に入ってるしなあ…とりあえずそっちの方向に向かう

「確かこの辺りのはずだが…」

贖罪の町のはずれ、そこに小生は居た。さっきから爆発音がどんどん増えていつてる様な気がするが…

辺りの様子を伺いながら先へ進んでいく。と、最深部に何かの氣配を感じた。壁に背中をつけ、頭だけを出して確認する

「（おっとお…これはこれは…）」

最深部の少し開けた場所に、一人の人影。その周りには戦神の名を持つアラガミ、「クアドリガ」が3頭、人影を囲んで戦っていたの

だ。正直、シャレにならない乱入クエストである。

冒頭でミサイルを放つアラガミもいると書いたと思う。…確認する  
なら後にしてくれ、まずはこの話を読み終えてからだ。ちなみに第  
一話参照。そのアラガミがクアドリガである。

ベルリンのシンボル、ブランデンブルク門の上にそびえるヴィクト  
リア像の乗る四頭立ての馬車がクアドリガと呼ばれる。

また、ギリシア神話の太陽神アポロンの乗る太陽の馬車とその馬車  
の由来であるとされる。

引用・G O D E A T E R   W I K I

前面装甲を開いてミサイル撃ってきたり、後ろにあるミサイルポッ  
トから誘導ミサイル何発も放ってきたり、そして何より怖いのがそ  
の巨体だ。体躯はおよそ7メートル強、なのにその機動性は戦車の

比ではない。初見のとき何度こいつに轢き殺されそうになったか…

とにかくだ。ゴッドイーターたるもの、他人のピンチを黙って見過ごすことなど出来まい。ホンとなら逃げ出したいところだが。考えてもみるよ、戦車にナイフ一本で戦争挑むようなモンなんだぞ?!  
…まあ慣れてるけどさ

「いや~~~~っほおおおお!!!」

ダッシュ+きりもみ水平切りで一体目のクアドリガの足を攻撃。攻撃したクアドリガが苦痛の音を漏らす。それに反応し後の二体がこちらに注意を向ける。続けて戦うのもメンドクサイので困ったときのスタングレネードを使う。3匹が目を眩ませた瞬間、小生は人影を引っ掴んで一直線に逃走。こんな凶悪な状況にわざわざ構ってられるか。

ゴッドイーターたるもの、逃げて生き残ることも大切だ。右腕アラガミの人もそういつてた。元氣してるかなあ、ジャックスパロウ。

「ぜえ~~~~はあ~~~~」

現在小生と救出した人は聖堂の中で息を潜めていた。大丈夫、偽装フェロモン吞んでるからバレにくいと思う。え？末期の息のような呼吸してる時点で潜めてない？こまけえことは、ってことにしといてくれ。

救出した人は女の子だった。肩甲骨辺りまで伸びた淡いピンク色の長髪、どこことなく釣り上がった目、その肌は白というよりはどちらかと言えば褐色に近い。漆黒のボロマントに身を包んでいる。

あれだけ走ったのにまったく息の切れた様子がない。疲れたけどレーションなんて食ったらカラッカラの喉に詰まって死んじやいそうなんで止める。嗚呼、この回復薬が錠剤でなく飲み物だったら…

「なぜ、じゃま、した？」

いきなり喋りだした。恨みがましい目でこちらを睨んでいる。紅の瞳が怒りを表していた。…何で片言？

「いや、邪魔っつーかあの状況でなんとかってのも無理だろ…」

「いらない！！ハラへった！！もうどこかいった！！くえない！！」

…通訳すると、助けなんかいらなかった！あいつら食べようとしたのに邪魔しやがって、あいつら食べようとしたのもうどっかいっ

ちまって食えねーじゃねーか！…何で分かるかつつたら…なんとなく？というかほぼ憶測だけど

「お、落着け、君はアラガミを喰うわけじゃ…」

「ハラへったー！ー！ー！ー！ー！」

いつの間にか出現した大剣で辺りを叩き切り始めた少女。アブネエ  
エエエエエ！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！  
？！

「うえええん！ー！」

声で泣いてるけど顔は般若のようですけどおお！ー！ー！ー！ー！ー！ー！  
つとこの娘何なの？！

グオオオオオギギギギギギ……

見つかつちやつたー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！  
たよおおおお！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！  
！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

## 黒い少女（後書き）

ちなみに神無月さんはピンチになると理性が飛んで黒い翼が出ます

……

ウソです。すいませんでした

## 戦車祭り（前書き）

友人のアバターが出演します。キャラとして可愛がってやてください  
え  
w  
w

## 戦車祭り

「またせたな！！」

壊れてしまった教会のステンドグラスの上から一人の人物が突入してきた。このタイミングとか狙ってやったんじゃないかとか思わないこともないが、とりあえず感謝しておく。なぜだろう、最初のセリフが大塚さんで再生されてしまったのは小生だけではないはず。増援の到着である

「マキリ！」

「まったくやってくれるぜ…やっとヒロイン全攻略できるかと思っただけに、だ。罰としてなんかエロゲー奢れ」

颯爽とかつこ良く登場したのにもかかわらず、このなんともいえないセリフを吐いたのは小生の仲間、マキリである。類稀なるバトルセンス、冷静で的確な戦闘スタイル、顔ランク、どれをとっても上位に属する彼は生粋のエロゲーマーでもある。彼のターミナルの容量は外付けハードなどで1テラを超えているにもかかわらず、ほとんどがエロゲーのセーブデータで埋まっている。なんというか…残念である

「わかったよ…金は渡すから自分で買え」

「いやだね。お前が買って、それを渡すことに意味があるんだよ」

「どついう意味だ？」

「純潔純情チエリーボーイで通っているお前が情欲の塊であるエロゲーを買った、という噂が広まるだけで俺は十分だ」

「マキリさんマジ鬼畜」

勢いつけてジャンプ、クアドリガの顔に当たる部分を切る。ガイコツ頭が苦痛の悲鳴を上げる。マキリは神機を銃形態に変更、後部のミサイルポッドに照準を合わせる。

「くたばれクソ戦車！」

銃口から放たれた光の玉は、数メートルのところで停止する。刹那、光の玉から雨霰のごとく大量の氷結弾が放たれる。秒間数十発。数で押すタイプの弾丸だ。小生が切りつけてひるんでいると同時に、その弾丸はクアドリガのミサイルポッドを粉々にした。

「くたばれえ！！」

きりもみ水平切りでクアドリガの全面装甲を集中的に小生が攻撃。マキリはショートブレードでクアドリガの一番攻撃の通る感覚器官をジャンプからの連続切りで攻撃する。

その二つの部位が脆くも結合崩壊を起こすと同時に、クアドリガは断末魔の悲鳴を上げて倒れた。後2体。

「いや、後1体だ。後1匹はおそらくコウキと刹那がやってくれる。丁度良く来てくれたみたいだな！！」

先ほどのマキリと同じ方法で2体目のクアドリガが姿を表した。結果は…言つまでもない

「…ふう…ッ！…ふう」

「なんとなく不吉な空気が漂うよな、そのセリフを文面にすると」

「ちょっとダメージくった。主に心に」

二人は神機を捕食形態に移行、クアドリガの素材を回収する。

「おっ、戦神油！！ラッキー！」

「これで揚げ物でも作ってみるか？お前の好きなエビフライとか」

愉快げに笑うマキリ。この男、生粋のサドである

「なにがどうなってそういう考えに行き着くんだよ腹壊すってレベルじゃねえぞ…もう配給のエビフライ食えねえ…」

「あぶら、うまいよ？」

「君の胃袋はアラガミ級なんだなって君まだいたのかよ」

そこには前回の最後で大暴れした少女がまだいた。クアドリガのミサイルが飛び交い、小生たちの放ったバレットが飛び回る中、よく生きてたなと思う。

「これ、くつていいか？」

「「え？」」

「ごはん！！イタダキマス！！」

この娘と正反対の白い肌の色の少女を思い出した。あの子の口癖だったな…元気してるだろうか…と懐かしき昔の記憶に思いを馳せていたら…

少女の腕が神機の捕食器官そっくりに変わり、クアドリガの死体×2を喰いはじめたのだ。

「うん、うまい！」

「マキリ、殴っていいか？」

「よしわかったオラァ！」バキィ

「へぶっ？！何で小生が殴られるの小生が殴るってんのに？！」

「痛みを感じるということは夢ではない…か」

「いえ〜い右から左へ総スルーって神無月はぼやいてみたり…」

「いい年した男がするもんじゃねえよ。それよりこの娘だ。なかなか美人じゃないか……」

「そっちかよ?!」

改めて少女のほうを向く。丁度食事も終わったようだ。

「なあその君」

「ごちそうさま」

そのまま歩きさっいていこうとする少女。……小生っていぢめられてるのかなあ……（涙）

「ま、待ってくれ!君と話がしたい!」

「……なに?」

「君は何だ?」

「しるか!」

「まさかの即答?!」

これが出会いである。

「任務ご苦労二人とも。神無月から増援の要請が来たときは正直びっくりしたよ。百戦錬磨と呼ばれるレベルのお前が誰かに頼るんなぜ珍しいからな。応援要請の通信は録音して売りさばくことにするよ」

「コウキサアアン?!なに企んでやがるんですか一割利益くれ」

「この状況にツツコミがないことのほうが驚きだな」

「して二人とも。その子は誰だ?」

「ふ」

今現在小生はコウキと刹那と合流し、ヘリに乗り込んだところだ。刹那というのはもちろん小生の友人の一人だ。新人でかなり実力は高く、ここ数ヶ月でレベル10までの依頼をこなすまでになった少女である。刹那もこの状況を飲み込めないでいるようだ。

「話が進みませんので私が話します。…君はアラガミなのかな?」

「「まさかの直球?!」「」」

「うーん…あらがみってなんだ?」

「「「わかってなかった――！！」」」

「いや、納得だ。この世界の人間でアラガミを知らない人間はほぼ皆無だ。アラガミ自体は自分達の事をアラガミと呼ばれてることすら知らないだろうしな」

「「「なるほど」」」

よかった、疲れてるけど頭はさえてるわ、小生。

## 深夜帰宅（前書き）

友人がわざわざアドバイスをくれました。知人が見てくれていると  
いうのはなんだかいい気分です

## 深夜帰宅

数時間後、小生たちは誰もいない深夜のフェンリルのエントランスをこそそこそ歩いていった。当然だ、天下のゴッドイーターがフェンリル内にアラガミを持ち込んだとなると前回同様えらいことになる。コウキがハッキングし、帰等時の報告を多少捻じ曲げてもらった。このことは今は誰にも内緒だ。アラガミとの共生する道への新たな可能性である。

「一旦俺の研究室に連れて行こう。あそこなら多少は何とかごまかしが効く」

「……りょくかい」

前記（第一話）の通り、コウキは天才化学者である。彼はその功績を認められ、自分の部屋とは別に、個人の研究室まで保有しているチートキャラである。今暮らしている以上の部屋を望むわけではないが、やはりちよつとうらやましい。

「さて、と。ここなら防音設備も整っているし、壁の強度も前回のことを踏まえて対アラガミ用に加工してある。それに使っていない研究室をいじればこの娘が暮らせるようになるだろう」

「防音設備つけた理由がカラオケしたいってだけだったのは秘密だ」

「余計な事言わないの神無月。さて…まずは一応身体検査しとくか。刹那、手伝ってくれ」

「了解しました。じゃあこっちに来てくれる？」

反応しないアラガミの娘。あんなに元気だったのに、なぜだ？

「……………」zzzzzz

「（寝てる…）」

「（寝てるな…）」

「（寝てますね…）」

「（寝顔写メゲット…と）」

「なにやってンですかマキリさんン？！？！」

「シッ！この娘が起きます！」

「「へい」」

「仕方ない、明日にしよう。俺は深夜アニメ見てから寝るわ。バガラリー全部見ちゃったし」

「俺はエロゲーの全トゥルーエンド見てから寝るわ」

「私は……………」ウーン

「無理して個性を見出そうとするなせっさん。マキリはいちいち言わなくていい。読者がよからぬ妄想を繰り広げてしまう。あとお前から全員早く寝ろ」

少女をソファで作った簡易ベッドに寝かせた後、それぞれの部屋に解散する。風呂にはいり、自分の部屋のベッドに寝転がり、電気を消す。これから小生たちはどうなるのだろう。人型のアラガミ…これで2例目である。人類とアラガミとの共存…アラガミとヒトとのコミュニケーション…戦いでしかこの世界を知らない小生は、たったいま生まれた新たな可能性に心を震わせていた。

「うん…」

朝か。窓から入る僅かな日の光が目につき刺さる。なんだかぬくい。隣に何か生き物の気配がする。漢が一度は夢見るであろ<sup>オトコ</sup>うシチュエーション。だがしかしそれはふざけた幻想に過ぎず、現実を知り、男は幻想をぶち殺されるのである。隣で誰かが寝ている

「むふにゃ…あん…うへへ…」

いっておくがさっきのは小生ではない。小生の隣で寝ている、この世間一般的には美少女と呼ばれる部類の少女が、寝ぼけながらに吐いた言葉である。

「ン…お兄ちゃん…おふぁよ…」

そういうわけだ。いいぜ…まだそっちの可能性を捨てきれないってんなら…まずはそのふざけた…

「お兄ちゃん、おはよつのキスは？」

…殺せませんでした。ここまでくると正直無理。こいつはイヅナ。小生の、（非常に残念だが…だからそっちじゃねえって！！）妹である

「おう。とりあえず深夜に無断で小生の部屋に入ったことを詫びてもらおうか」

「ん~~~~~」

スルーである。目をつぶって唇を若干突き出すようにしている。なんだこれ。

「とりあえずお前は服を着ろ。下着で寝るといふのは男女問わず感心できん」

「どつでもいいから、ほら、ん~~~~~」

頭を掴んで向こうへ追いやる。「むゝゝゝ」とか言ってもダメです。さつきから波線を使いすぎだ。とりあえず身支度。ボサボサの頭を掻きながら洗面所で歯磨きをする

「お前も身支度しろ、年頃の女がはしたねえカッコしてんじゃねえ」  
口をすぎ、さっぱりする。大分歯ブラシの先っちょが開いてきた。そろそろ買い替え時かもしれない。

「歯ブラシ忘れちゃったからおにいちゃんの貸してねえ」

「ふざけたおせ、ほざきやがれ、いい加減にしやがれバカ妹<sup>いも</sup>」

「はぁん…／＼／＼／」ビクッビクッ

誰か助けて……

ここまでのイヅナの変態的特徴ワースト3を抑えておこう。

1・極端なブラコン。寝込みを襲われた経験数知れず。

2・なぜか小生に対してだけDM

3・甘えたがりを通り過ぎて兄に盛っている。甘えたい盛りとか、そういうレベルではない

以上。抑えました！！パタン…ハア…

「他の女の匂いがする…」

ビクッ！！怖！！ヤンデレの妹に愛されすぎて夜も眠れません（貞操的な意味と命的な意味で）

「仕事で一緒だった刹那さん以外に誰かとあったのかな？かな？」

「その喋り方止めないと怒るって何度言ったらわかるんだ…」

もうここまで来るとどうしようもないので秘密を打ち明けることにする

「後でこっそり教えてやる」

「なにに？お兄ちゃんの好みのプレイでもおしえてくれるの？！」

めっちゃキラキラした目でこっちを見るな。服を着ろ。男の子が反応してしまう！！

## 深夜帰宅（後書き）

なぜでしょう、小生の小説ではヒロインが大概変態です。どうしま  
しょうww

## 妹（前書き）

若干シリアスが入ります。まあそんなことはどうでもいいのでいつもどおりたらうんとお読みください。

## 妹

小生とは真逆の容姿。髪の色は深い蒼のショートカット、赤渕のメガネ、身にまとっている服はジューダスゴシック上下。白いものを多く身につける小生とはまったく方向性が逆だ。数年前…小生の髪が白に変わったとき、彼女はゴッドイーターになることを決意した。そして数年後、白と黒の死神兄妹の片割れとして、フェンリル内でも5本の指に入る実力になりあがっていた。

小生のせいで家族が、戦うことでしか明日を見出せない兵隊になってしまった。この世界では失うことを恐れてはいけない。生き物死ぬは自然の摂理、それがどんなことであろうと変わらない事実だが、せめてこいつだけは。アラガミなんかには殺させやしない。兄として、家族として、ゴッドイーターとして。

バッドエンドなんぞ、小生が喰いちぎってやる。

「ふん…まあとにかく会ってみないと解んないだろうね…」

事のあらましを大体に説明した。小生とイツナはコウキの個人研究室に続く廊下をゆっくりとしたペースで歩いている。寝起きだからだ。昨日の戦車祭りの余韻か、起きぬけはとてもだるかった。

「そうだな。どれにしろ、面白そうなことに変わりはない。0・1パーセントでも面白みはあったほうがいいからな」

「すごい冷えた言い方してるけどさ。めっちゃ口元緩んでるよ？本当は面白そうでたまらないんでしょう？かわいいなあかわいいなあ抱いて！」

本当に自分の欲望には忠実だ。こいつの願いは出来るだけ叶えてやりたいが、こればかりは絶対にダメだ。妹を思う故に、である。……小生も大概シスコンなんじゃねえか？そう思わないこともない今日この頃

コウキの研究所の前に付くと、ドタンバタンと音がする。派手にやっつてるようだ。

「イツナ、小生の後ろから離れんなよ？」

「はい」

意を決して扉を開く。

「俺のメガネ返せ——！！」

「あははははははははは！！！！」

「はあ……」

書類が宙をまい、機材の一部は凹み、…なんかもうてんやわんやである。メガネを盗られたコウキがメガネの奪還を試みて少女を追いかけている。それを端っこで刹那が呆れた様子で眺めている。何もしていないのは自分に何もしようがないことを悟ったことだろう

そういつているうちに少女が走ってこっちに向かってくる。マズイ、少女の姿とはいえ相手はアラガミだ。追突されたら肋骨の1〜3番ぐらいは持っていられるかもしれない。自分の後ろにはイズナ、ここが最後の砦、ここから外に出られては面倒が多すぎる！！覚悟を決めて踏ん張る！！

ぼふっ！！

入りましたぁ！！腹筋辺りにものすごい痛みを感じます！！正直、  
たまりません！！…勘違いすんじゃないやねえ、小生にM属性はない！！  
内臓がつぶれそう的な意味だ！！

「あゝん…」

止まってしまったことが残念なのか、少女は少し後ろに下がる。

「よしよいい子いい子…お願いだからそのままおとなしくね…」

頭を撫でながら、ゆっくりと少女を中へと戻す。何故か幼いものの  
扱いには慣れている。誰に教えられたわけでもないのに。イズナも  
付いて中に入り、ドアを閉め、ロックをかける。

「…ゲホツゲホツ…やばかった…朝食べたウィンナーが出そうにな  
った…」

「お兄ちゃんのウィンナー、美味しかったなあゝ／＼／＼」

「ややこしいことほざくな。小生だけならまだしも、他人がいる状態でそういうこと言うのは止める。もう朝食作ってやらんぞ」

「ちょーしょく?」

少女が不思議そうな表情を見せる。今日の本題だ。

「そう、朝食。朝ごはん」

「ごはん?! ごっはん〜ごっはん〜」

「理解は早いようだ。主に食事関係だが」

コウキが先ほどの衝突の際に少女の手から落ちた自分のメガネを拾う。コウキには悪いが、服がぼろ雑巾のごとく破けていた。フェンリル支給の服なんで安いっちゃあ安いので買い戻すのは苦ではないが。

「マキリは…いいか。あいついると小生が突っ込みに疲れる」

「呼ばれてるとかそんなものはどうでもいい、少女がいればそこに俺あり！！マキリ参上！！」

「「「おつわああ？！？！？！？」」「」」

最近神出鬼没がデフォルトで備わるようになったマキリである。どっから入ってきた？

「まあ残念ながら共犯者全員集まったところで、会議を始めよう」

## 神機使い殺し（前書き）

最近ゴツドイーターやってません。ラーヴァナ討伐もまだです。チ  
クシヨウ仕事めww

## 神機使い殺し

「小生の見立てではこいつはおそらくスサノオが人型になったモンと思うんだ。暴れてたときにどこからともなく出したあの大剣は、それこそスサノオの尻尾の先の剣にそっくりだった。そして捕食器官が神機にそっくりだったのもそれで合点がいく」

スサノオ。

「神機使い殺し（ゴッドイーターキラー）」の異名を持つ第一種接触禁忌アラガミ。

神機を好んで捕喰するという偏喰傾向から、アラガミ化した神機使いの成れの果てとも噂されるが、その生態は謎。名前の由来は、日本神話に登場する神スサノオ（スサノヲ、スサノオノミコト）より。

日本神話における三貴子の末子に当たる。ヤマタノオロチ退治等で有名。

引用・G O D E A T E R   W I K I

漆黒の体躯、頭から背中にかけて生えた淡い桃色の長い髪、サソリのような概観。両手のはさみは神機の捕食器官に酷似しており、何の皮肉か、神機を好んで捕食をするという神機使い殺し。あまりの危険性から一般の神機使いは接触すら禁止されているアラガミだ。

「ここにいる奴らは大体がそうだろうと思ってただろう。しかし驚いたのがこいつの偏食傾向だよ。まさかコア摘出後のアラガミ繊維を好んで捕食してるとは…」

マキリが神妙な面持ちで話す。また用語が出てきたので解説してあげる。偏食傾向とは、アラガミが持っている捕食傾向のことである。簡単に言うと、アラガミにも好き嫌いがあるってことだ。基本的に自分と同じ外観のものは捕食しない。

「なぜこんなことになったなんて考えるのは野暮でしょうが…おそらく前回の事例と同じ、と考えてよさそうですね」

簡単かつ端的に刹那が解説する。アラガミが進化する過程で行き着いた、進化の袋小路。それが人型だったのだ。

「早い話がアラガミ スカベンジャー 腐肉食動物ってことか」

「言い方が気に入らんが、おそらくそうだろう」

腐肉食動物とは、捕食者プレデターの後に付いていつて捕食者の食べ残しをあさる動物のことである。なるほど、神機使い（プレデター）の後から出て行って死体を喰らう。だがその言い方が小生はとても気に食わなかった。

「まさか神無月？こいつをヒトとして見てんじゃねえだろうな？こいつは腐ってもアラガミだ。いつ襲い掛かってくるか分からないんだぞ？詳しいことも解っていない状況で、憶測だけで物事を進めるのはどうかと思うがな」

コウキが冷静かつ冷徹な物言いをする。彼とは同期だが、はつきりいつてそんなに過去を知っているわけではない。みな暗い過去を持ちながらに生きているやつがほとんどなので、彼もそうなのだろう。だから小生はあまり強くはいえなかった。

「そういうお前こそどうなんだ？そのいつ暴れだすか分からないアラガミをあるうことかフェンリルの自分の研究室に招き入れたんだ。お前も期待することがあったのことだろ？」

不遜な笑顔を浮かべながらマキリがいう。こいつにだけは弱みを握られないようにしよう

「とりあえず、だ。とつとその精密検査をしておこう。もしかしたらなにか面白いことが分かるかもしれない」

後ろではイヅナと少女が追いかけてこをして遊んでいた。

数日後、小生とイズナはアラガミ討伐ミッションを受けていた。ザイゴートやオウガテイルなどの雑魚一掃ミッションである。アラガミの少女も一緒である。少女のアラガミとしての身体能力その他もろもろなどを調べるためだ。小生たちにとっては簡単すぎるミッションだが、ここのところハードなミッションばかり受けていたので丁度いいミッションになった。

「うーはーんー」

「こうしてみるとただの無邪気な子どもにしか見えねえけどなあ……」

「こういう娘に限って不幸が降りかかるものだけど……どうしてだろうね、この娘には幸せになってもraitakunなるっていうか」

いつの時代もそうだ。無邪気で、邪を知らない子どもが真つ先に犠牲になる。汚れきった大人だけが生き残り、自らの私腹を肥やし、己の保身だけを考える。いつの時代だってそうだ。その大人も今の時代となつてはただの捕食対象に成り下がり、小生たちゴッドイーターに生かされているに過ぎないのだが。（そういう言い方はしたくはないのだが）

「今回は時間もあるし、3人そろつてのらりくらりエリア内を散策

しよう。ちなみにターゲットの数はオウガテイル4体、ザイゴート5体だ」

「了解！」

「ん~~~~りょかい？」

不思議そうに首をかしげる少女。この娘の教育のことも考えなければなるまい。帰ってやることが出来てしまった。

「わかりましたーってことだよ」

「ん~~~~？」

……………予想以上に難航しそうだが。

## ともに戦う仲間（前書き）

刀馬鹿さんが出演されます。狩りゲー仲間です（小生が勝手に思い込んでいるだけかもしれませんが）ww

この人も物語の中核となる予定death。お楽しみに~~~~

しかし、今考えたらキャラ全員作者の友達か本人って…なんなんでしょうねwww

## ともに戦う仲間

「ええい！！やああ！！」

イヅナが振るったヘルサイズ真が空中のザイゴートを次々撃墜していく。一匹がイヅナに突進するが、ジャンプでかわされ、頭上に乗っかられる。

「ゴメンね、とつととくたばって？」

超至近距離（というかゼロ距離）からのインパルスエッジがザイゴートの目玉を完全に粉碎する。イヅナの服は暗い色をしており、返り血がほとんど目立たない。だがうつすら浮かぶ血の色は、彼女の強さを表していた。

ザイゴートが地面に落ちる直前に一回転ひねりジャンプで着地するイヅナ。我が妹ながら、恐ろしいやつよのう…

「お・に・い・ちゃ〜ん！！」

着地と同時にステップで接近、腰辺りに抱きついてくるこの動作がなければ完璧だったんだが。顔をぐりぐりするな。手が小生の前のほうをまさぐろうとしてきたので手首を掴んで引き剥がす

「やめろ。戦闘区域で軽率な行動は避ける。兵法の初歩の初歩じゃねえか」

「だってお兄ちゃん、いい匂いするんだもん…なんていうか、クセになる生臭さというか…」

「やかましい！！！！なんもしてねえよ！！」

「え？ナニをしてたのお兄ちゃん？そこんとこ詳しく私と一晩熱く語りつくさない？」

「もう黙れよ…この娘が空気じゃねえか…」

「めだまうま〜」

ぐちゃぐちゃと肉を喰いちぎる生々しい音を響かせながら、少女はザイゴートやオウガテイルの死体を美味しそうに捕食していた。なぜか捕食器官の租借と同時に顔の口ももぐもぐいわせている

「純粹無垢ゆえタチの悪い…」

「悪逆非道にございますってか…」

捕食器官を器用に使い、ザイゴートの柔らかい目玉の部分をえぐり出す様にして食べている。さっきの目玉が粉碎されたやつは普通に丸ごと食べていたが。

「とりあえずこんなところか。ミッションコンプット」

P i p p i p p i p p i

神無月の携帯がけたたましい音で鳴り出した。これは…エマージェンシーコール？

「…ザーーー…こ……た…」

電波状態が悪いのか聞こえにくい。発信場所はこの近くだった。ゴッドイーターが使う携帯電話は、緊急時の応援が早急に場所に到達できるように発信位置まで画面に表示される。

「誰からだろ？この近くだよね？」

「わからん。だが大物である可能性は十分あるわな。おそらく単独で大物に挑んでやばくなっただってとこだろ」

「もつとごはん〜」

丁度いい。少女も飢えているようだし、行ってみるか。いざとなればスタングレネードでそいつを目晦ましして…

「お兄ちゃん？眼が濁ってるよ？」

「くそっ…つくづく俺も運が悪いな…！」

必死にアメノムラクモ秘をぶん回す。ダッシュステップ、振り下ろし、横なぎ、たたき下ろしのコンボでダメージを与えていく。が、機動性の高いシユウ種にバスターソードはあまり向いていない。俺は囲まれていた。シユウ種3匹に。シユウ、シユウ墮天、セクメト。圧倒的不利だ。後ろからシユウ墮天種が雷弾を放ってくる。

「ぐおおあああああ？！！！！！！」

吹き飛ばされ、背中から地面に落ちる。肺から空気が抜け、呼吸すらままならない。マズイ。非常にマズイ。このまま俺はここでくたばるのか…

「濃縮アラガミ弾<sup>バレット</sup>レベル3！！3wayニードル！！」

シウウ墮天の頭が吹き飛ばされる。だが、まだ死んではない。頭を抑えて苦しみのにた打ち回っている。後ろから容赦のない一撃を食らわせる戦闘スタイル…

「よう、大変そうだなロージウムさん。…めんどくさいからロージさんでいいか」

「んだよ…それが年上に対する態度かよ…ゲホッ…」

「回復弾打ちますね〜これで皆元氣つと」

女の子の神機の、ミラクルステッキ恋から放たれた玉が重力に従って地面に落ち、着弾地点からコマのように回転、回復効果をもつ光

を辺りに撒き散らす。おもしろい改造バレットだ。体力が回復した俺は立ち上がり、再び神機を構える。

「救援依頼が来てたんで来ました。黒月古城、これよりロージウムさんの援護任務を開始する」

こんなときはやっぱりスタングレネードだ。3匹が襲いかかろうとした瞬間にグレネードを破裂させ、3匹同時にめまい状態にする。

「喰いちぎれ!!」

「いただくよ!!」

「もらった!!」

3人同時に捕食、それぞれバースト状態になる。俺がシユウ墮天の頭を狙ってチャージを開始する。黒月とイツナは両翼を連続切りで攻撃していく。

「くたばれや!!!!」

3人同時にフィニッシュの斬撃を喰らわせる。シユウ墮天種は両翼と頭を完全に碎かれ、その場に崩れ落ちる。両翼が完全に切り取られ、体の中心線に沿って真つ二つになった死体を置いて3人は戦闘に戻る。残り2匹も意識を取り戻したようだ。2匹同時に指をクイクイして挑発してくる。同時に怒り状態になったようだ。

「お望みならだ！！たっぷり食らわせてやるよ！！」

黒月がシユウ墮天を捕食したときに入手したアラガミバレット、爆雷連弾をセクメトにこれでもかというほど浴びせていく。（実際3発だけだが、それに交じって黒月のオリジナルのバレットも飛んでいく）セクメトはバレットの追加効果でホールド状態に陥った。怒り状態のセクメトはホールド状態に陥りやすいのだ。

「イツナ！！シユウを頼む！ロージさん、今だ！！」

「おう！！今夜は焼き鳥だあ！！チエイサアアアアア！！！！」

思い切り振り下ろしたアメノムラクモ秘がセクメトの頭から股下にかけて一直線に線を描く。右半身と左半身がズルリとずれ、それぞれ反対方向に崩れ落ちる。またしても真つ二つ。血のカリブ海が出来上がった。

「とつとと死んでねシユウ君？これが終わったらお兄ちゃんがラブ  
ラブチュッチュしてくれるんだから邪魔しないでよね」

「しねえよバカ！！」

「お前らホント仲いいのな」

「モルターセット、っと。すみませえ〜ン誤射します」ドーン

「堂々と宣言しやがった？！ぶべらっ？！」ドカーン

俺が吹き飛ばされたと同時にシユウが地面に倒れる音が聞こえた。  
いろんな意味で息ぴったりである。

## ともに戦う仲間（後書き）

ロージさんが刀さんです。いきなり不憫ですみませんww

やっと決まった名前（前書き）

こればかり書いてるせいでほかの小説が進まないのは内緒の話ですww

## やっと決まった名前

「まあいい、援護感謝するよ黒月くん。さすがにこの数一人は無謀だったわww」

「そらそうでしょうが。何でカラドボルグじゃなくてアメノムラクモにしてたんですか？対シユウならロングブレードのほうが立ち回りは楽でしょう？」

「いや、前のミッション受けてそのまま矢継ぎ早にこのミッションしたから装備品いじってなかったんだよね…だから前回の戦利品がまだポーチに入っていて、せっかく手に入れた鳥神大爪捨てる羽目になっちゃった…」シヨボン

「あるあるネタですね分かります」

「何で一人で受けてたんですか？他にも待機中の神機使い居たんじやありません？」

「あ……それは…なんつうか…」

イヅナの質問が核心を突いたのか？感情の起伏が激しいロージさんはウソを付くのがド下手である。顔に冷や汗がだらだらと流れている

「まだでてきちゃダメか？」

「「「……………」」」

ロージさんの後ろにある建物（というか廃墟）から声。

「みちやダメエエエエエ！…！何にもいないったら…！何にもいないったら…！」

「……………アンタはどこぞの谷の姫か。いい人なんだけどなあ……………ウソつけないって大変そうだ。」

「「」はーんーまーだー……………」？」

……………

「何にもいないったら…！何にもいないったら…！」

「お兄ちゃん…何のためらいもなくパクるのはどうかと思うけど…」

正論ですホントにありがとございました。

「え？絶論？」

「「台無しだ！！」」

ホントにすみません。

「ここまで来たらしょうがない、君たち兄妹を信じて話そう」

「「どうぞどうぞ」「つボイスレコーダー

「その手に持ったボイスレコーダーのスイッチを切ってからだ！！  
…まあいい、出てきて」

廢墟の影から現れたのは少女だった。一言で言えば、白と黒。（あれ？一言になってなくね？）この二色で統一されている。白い肌、腰まで伸びた黒い髪（一本一本がかなり太い。さながら触手のようだ）。身長はイヅナよりも少し小さい。儚げだが、濃い桃色の瞳には強い生命力に満ち溢れているような気がした。こちらの少女と同じくぼろきれをまとっている

静寂を破ってイツナが口を開く。

「髪が触手っぽいし、なんだか頭足類の少女を思い出すね！！なんて言っただけ、イ……」

「ストオオオー————ッ！」

全力で止めに入る。ヤバイヤバイ……（著作権的な意味で）

「まったく……話が進まないじゃな烏賊……」

「漢字にしてごまかしたつもりですか?! …もういい、もしかしてこの娘、アラガミですか?」

「?!」

かなり驚いた表情をしているロージさん。そりゃそうだろうな

「小生の後ろに居る子もアラガミなんですよ」

コウキのラボ

「そうか、まさか他にも人型のアラガミがいたなんて…」

「まさに灯台元暗しってわけですか。そりゃ誰にも話せませんよね…」

小生はあらかじめ借りていたコウキのラボのカギをロージさんに渡

し、こそーりラボへと戻ってきていた。避難用の脱出経路を使って  
出入りしたので、出撃記録は残らない。ロージさんは今日一日休暇  
をとっていることになっている。神機はメンテの女の子にお願いし  
てこっそり持ち出したらしい。あの子かわいいですね。

小生たちは普通にミッションを受けていたので問題なかった。

「すごい、この娘の髪ホントに触手だ〜」

「うねうね〜うねうね〜」

「あ、あの…止めて頂きたく…」

困ったような表情で二人の接近をかわす少女2（仮）

「ずいぶんと賢そうですね」

「ああ。ウロヴオロスの頭部から出てきたんだよ、あの娘。コアに  
近いところだったから神経細胞が発達してるんじゃないかな」

ウロヴオロス。

無数の触手と目を持つ異形の超弩級アラガミ。  
平原の覇者とも呼ばれ、山のように大きな体を持つ。

名前の由来は、己の尾を噛んで環となった「尾を飲み込む蛇」の意を持つウロボロス。  
死と再生、不老不死などの象徴とされている。

引用・GODEATER WIKI

「なる。あ、そうだ。いつまでもこの娘扱いでは何かと大変だし、名前付けとこうか」

「「「はい!」「」」

「ハイマキリ君。ってお前らいつの間に??!」

「フフフ…俺くらいになると神出鬼没がデフォルトで備わるようになるのだよ…ズバリ!……」

「エロゲーのヒロインの名前はなしだぞ」

「……………」

「ハイ！」

「ハイコウキ君。アニメキャラのヒロインの名前もなしだぞ」

「……………」

「ハイ」

「ハイ刹那君。名刀の名前もなしだぞ」

「……………」

「ハイ」

「ハイイツナ君。BLゲームの男の娘の名前もなしだぞ」

「……………」

「ハイ」

「ハイロージ君。君の身内の飛龍の名前もなしだぞ」

「……………」

シ……………ン…

「何だよこの痛い静寂！！お前らまともに名前考えてやれよ！！」

「……………」  
めんどいからお前考えて……………」

「120%他力本願寺入りました〜っておいしい?!?!」

分かったこと。小生のツッコミのレベルは日に日に上がっていつて  
る。どうしてこうなった……

「あ~~~~~そうだなあ…スサノオの娘は…ミコト、ウロヴオロ  
スの娘は…リンでどうだ？」

前記の通り、ミコトはスサノオノミコトから、リンはウロヴオロスの  
環から取った。ウロヴオロスの名前を一瞬、サウザン。アイズ・  
サク。フェイスにしようかとも思ったが、流石に止めた。

雨が降りしきる中、俺たちは出会った（前書き）

刀馬鹿： いや、ここではロージウムさんとしておきましょう。大活躍ですww

雨が降りしきる中、俺たちは出会った

「そうか、リンか。ならばレンも必要だろう。そしてゆくゆくは二人組みアイドルユニットとして…いや、レンってなんかデジャヴを感じるからなあ…どうしよう…」

「デビュー曲は斬新さを求めてロードローラーを題材にしてみない？」

「コウキがまたヘンな方向に懲りだしたよおい?!なんつー曲のテーマだよそれ!!つか小生のネーミングセンスに対する評価は?!あと小説の評価は?」

「最後本音が入ってるぞ…悪くはないな。ただ、それだけだ。やりたい放題やりすぎなんじゃないか?だから評価に値しないっていう閲覧者もいるんだろう。なんだかんだで見てくれるのはツンデレと考えればいい」

「なるほど…プラス思考ってことか…つか本題ではなくわき道のほうが返事が長い?!あとの確な考察ありがとうございます」

「この人って毎回こっなの?」

「それが彼の作風…もとい、この部隊の空気なんですよ。まあ慣れてください」

第4部隊に所属しているロージウムさん。数ある部隊の中でもヘンタ……もとい、変わり者が多いと聞く第13部隊。はつきり言っ  
て想像以上だ（いろんな意味で）。こっちに転属できないかな…  
そう思わないでもなかったロージウムさんであった。

「だーかーらー！刀が一番完成された武器なんだって！！」

「いいえ小生はそうは思いません！デスサイズこそ完成された武器  
です！あんなモン刀の側面に攻撃すればすぐボツキリじゃないです  
か！！デスサイズはそう簡単には折れませんよ？リーチ、威力、攻  
撃範囲、どれをとっても一級品です！」ドヤツ

「槍ならまだしもあんな重い、大振りの刃を先のほうに付けといて  
軽く振り回せるわけない！！叩きつけた瞬間折れるのは人のこと  
じゃないじゃないか！！その点、刀は小太刀というものがあってだ

！デスサイズのように玄人好みではなく、使おうと思えば誰でも使えるのだよ！」ドヤッ

「くぎぎぎぎぎぎ…」

ガシッ！！

「やるじゃありませんか。小生と同じくらいの好きな武器に対するこだわりを感じます…！」

「お前もな…俺の刀談義にここまで食いついてくる奴は初めてだ…俺たち、好きな武器は違えどこだわりは共感できるものがあるな。  
ライバル友よ」

「友と書いてライバルと読む！！漢とかいておとこと読む！！」

「獣と書いて？」

「オトコと読む！！ってなに言わすんじゃい！！」

このノリが好きだ。まるでどこかの新喜劇のようである。閲覧者が笑っているかどうかは解らないが、やってて楽しいというのは事実だった。

俺ロージウムと、ウロヴオロスのリンが出会ったのは丁度10日前。どんよりとした、薄暗い雨の日だった。

「ハア…一人でウロヴオロスとかどれだけ鬼畜なんだよ…しかも新種って…あのクソマッドサイエンティストめ、いつか一文字に切り伏せてやる…」

第4部隊所属、ロージウム。階級・大尉。端から見ればすごい階級だ。だが彼本人はあまりこの階級を好ましく思っていないかった。

なぜか。めんどくさい仕事が多く回ってくるから。必死に辞退しますといったのだが、あの鬼教官。そしてあの腹黒マッドサイエンティスト。二人の必死の頼み込みとあれば答えざるを得ない。だからなりたくなかったのだ。

少なくともそう思っていた。

大きい。ウロヴオロスを現す単語としてこれほどぴったりのものは  
そうない。その巨体は歩くだけでゴッドイーターにダメージを与え、  
巨体であるにもかかわらずジャンプすらこなし、拳句ビームまで撃  
つてくる。

なにその動く起動要塞。図体がでかい分攻撃は当たる。が、時々し  
てくる攻撃の中に突如前後にブルンブルン触手をぶん回す攻撃があ  
る。あれマジでシャレにならねんだよなあ

今回の討伐目標はそのウロヴオロスの墮天種らしい。

墮天種とは、もともとの個体が突然変異を起こし生まれた強力な個  
体のことだ。通常とは異なる属性を持っていたり、攻撃パターンが  
変わっていたりするなんとも迷惑な種類のアラガミの総称なのだ。

ましてやその相手はウロヴオロス。一筋縄では絶対にいかないのに  
もかわらず、俺一人で受けている。どうしてこうなった。

「生きて帰れるかなあ…遺言残しとくんだった…」

ズズーン…ズズーン…

ミッションスタート地点の反対側から大きな足音。よし、正々堂々後ろからチャ

ージクラッシュを食らわせてやるぜ!!

チャージクラッシュ。バスターソードのみに許された大技。己の気を刀身に這わせ、威力を限界まで研ぎ澄まし、一気に開放する。振り下ろされた斬撃のあとには真つ二つになった獲物のみ。ロージアムが使うアメノムラクモ秘は強力な神属性を持ち、それを弱点とするウロヴォロスにはうってつけの剣だった。

「まずはこっちから旋回するように後ろに回りこんで…」

「グオ？」

ぱったり正面からごたいめーん。オワタ。Orz

「グロオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!」

複眼を妖しく煌かせながら、ウロヴォオスが吠える。ビリビリ大地が揺れ、その威圧感に圧倒される。だが、俺はこんなとこ出立ち止まるわけにはいかない。

「いくぞ！！相手が神だろうとなんであろうと、この俺ロージウムが！！一文字に切り伏せてやる！！」

その覚悟に呼応するようにアメノムラクモが鼓動する。目の前の神を打ち滅ぼすために。

「おおおおおおおお！！！！！！」

ダッシュステップ、振り下ろし、横なぎ、たたき下ろしのコンボ。バスターソードの威力を存分に生かした攻撃のコンボだ。大きいものは総じて足が弱点といえる。その巨体を支えるものがなければ、自分の体重に負けて動けなくなるからだ。ウロヴォロスもまた然り

足を狙って斬撃の嵐を打ち込む。だが、巨体であるということとはそれに見合う体力を持ち合わせているということ。ちよつとやそつとのダメージでは倒れてはくれない。

「グロオロオオオオオオオオオ！！」

前足のように使っている触手を叩きつけて攻撃してくる。

「ぐお?!…あんまシールドは使いたくないんだがなあ…!!」

ガードはあまりしない。回避の後、避けられたことに驚く敵の顔を見ながらぶった切るのがロージামの戦闘スタイルだ。重い攻撃を受け止めると腕が痺れ、その後の反応が鈍くなるというのもあるのだが。

「クソッ…キリがねえ!!特務だから増援も下手に呼べない…あれ?俺なんかはめられたんじゃない?」

今更ながらことの重大さに気が付いたロージামだった。

## コイツだけは護ると決めた（前書き）

大剣の斬撃だけで戦うって表現が難しい…銃とか連携とか使うんだ  
ったら多少は華を添えられますが…剣だけで戦うってのがロージさ  
んのご意向なんですが…がんばるよ小生！！

コイツだけは護ると決めた

「困ったときはスタングレード!!」

こんなにでかくても効くものはちゃんと効くのだ。不器用に触手で複眼を覆うウロヴオロス。目が多いと混乱しないのだろうか。多眼のモンスターとかゲームでよくいるけど、気持ち悪いよりそっちを先に思ってしまう。

「さあ、終わらせる!!」

お遊びな考えはここまでだ。極限まで気を高める。己の魂にかけて、全身全霊の一撃を喰らわせるために。心が落着いてくと、自分の心臓の鼓動が聞こえてくるような気がした。

「終わりだあああ————!!!!」

無論たった数撃で終わるはずはない。こんな絶望的な状況では自分にさえ見栄を張りたくなるものだ。自分の心の弱さを垣間見たように、少し情けなくなるロージウム。だが生きてみせる。海賊の金髪コックもこんな危機<sup>ピンチ</sup>を幾度となくぐり抜けてきたのだ。同じ人間なのだから、不可能ではない。そんなどうでもいいことを考えていたこの間、1秒。さっきまでと考えていることが矛盾しているような気がした

ズガン！！！！

鈍い音を響かせ、振り下ろされた巨大な刃がウロヴオロスの複眼を捉えた。めりめりと言いながら刃が肉に食い込んでいく。意外と硬いんだよね、当たり所悪いとき。

「おおおおおおらああああああ！！！！」

一気に力を加えて振り下ろした。切口から大量の血しぶきが飛び散る。

「オオロオオオオ！！！！？？？」

どんな大きな怪物でも目をつぶされてはどうしようもない。思わずのけぞるように後ろに下がるウロヴオロス。だがそんな絶好のチャンス逃すわけにはいかない。2段ジャンプで上を向いたウロヴオロスの複眼にロックオン。

「くたばりやがれえええええええ！！！！」

神機を下に向かって垂直に、ウロヴォロスの複眼に向かって深々と突き刺した。傷をあらためてえぐる。後頭部にあたる部分に着地し、てこの原理で神機を切るように抜く。顔面を真つ二つに割られたウロヴォロスが、力なく脱力し、膝を付き、その巨体を地面に横たわらせた。

「勝った…ハハ…勝っちゃった…もう無理動けん」

全身の筋肉を限界を超えて使ったので、もう動けなかった。思えばずっとアドレナリンだけで動いていたような気がする。スタミナがゼロからなかなか回復してくれない。腕の筋肉がヤバイ。もう神機を持つことさえままならなかった。今夜の晩御飯何かな…割と本気でどうでもいいことを考えていたそのとき。

メリィ…

何かが裂けるような音。驚いてその方向を見る。先ほど叩き割ったウロヴォロスの顔面が無残に辺りに血の河を作っていた。ちよつと待ってさっきより傷口開いてないか？

これってアレか卵型のチョコの中からおまけが出てくる的なやつ？  
キンピカM●倒したと思ったら中から金ジ●出てきちゃいました的な？  
気のせいだよ絶対そうだもう無理もうヤダ今度は死ぬ俺が死ぬもう助けて！！！！

めりめりと言いながらどんどん傷口が裂けていく。中から何かが出てこようとしている。まるで卵から必死に孵化しようとしている雛鳥のように。そのときロージウムは死とは違う別の意味で嫌な予感がしていた。

ズルリ…又チャリ……ドチャツ…

殻というか死体の中から無事に(?)その物体は産まれた。そのとき、不思議なデジャヴがロージウムの頭の中を駆け巡る。

ひなの刷り込みってしってる？

あれは産まれたばかりの雛が、目の前で動いた者を自分の親だと思う、生命のシステムだ。

どうしてこうなった？

「女…の子？」

「……………」

死体から出てきたのは人型をした生物だった。親方！！中から女の子が！！↑（ロージは混乱している！！）

驚きすぎて動けなくなっている俺のほうを見る。

「……………」

いや、そんな不思議なモンを見るような目で見られなくてもね？俺にどうしろってんですか。なんか今の言動ってフラグってやつです

か？その答えを少女は言った。

「おとーさん…」

「やっぱりこうなるよねえちくしょおおおおー！！！！！！！！」

めんどくさいことはもうこりこりだ。自分の不幸を呪った。

「それからずっと一緒にいるってわけですか？」

「そ。やっぱりとくわけにもいかんだろ。隠蔽工作とかめっちゃくちゃ大変だった。メンテの娘と友達じゃなかったらマジでやばかつ

た。機嫌取りに素材貢がされたりしたし」

「まあそつだよな。だがロージさんよ、顔が大分にやけてるままで言っても説得力に欠けるな」

悪役みたいな笑いかたしやがるコイツ怖い。俺って表情に出やすいのか？

「あ？ああ…これはだな！別にそういう感情ではなくてだな！！むしろ母性本能に近い…」

「へえ~~~~~~~~。そおなんですかあ~~~~~~~~」

まるでこどもが新しい玩具が手に入ったかときのような、嬉しそうな顔です。神無月さん八重歯が怖いですハイ

「なんだその妙に間延びした返答は！？」

「男だったら父性本能のほうが正しいんじゃないですか？あとテンプレどおり過ぎて面白くないです」

流石兄妹、タチの悪さはとても似通っている。

「違うよ！ーお兄ちゃんはいつでもビンビンだもん！ー」

「いきなり何言ってくれてんだこいつはああああ！？！？！？！？！？」

「すみません、こいつ常時開放型なんです…」

なんだかんだで俺はこいつの苦勞が分かるような気がした。お互いがんばっていいこうな、神無月。

リンはとても頭がいい。僅か10日足らずで人間の成人レベルまで知能レベルが上がったからだ。良識があり、マジメ。ミコトは真逆だ。荒っぽく、直情的。だが、かなり繊細な一面もあり、イヅナと一緒に少女マンガを見てウルウルしていたところを見たことがある。おもしろいもんだ

「ロージさん、お茶が入りましたよ。皆さんもどうぞ」

髪の毛のような触手をうまく使って5人分のお茶を持ってきたリン。腕が多いっていいなあ。ドクター・オク。パス？嫌いじゃないよ。

「おう、アリガトな、リン」

「さて、今日ロージさん呼び出したのは他でもありません。こいつらの服です」

「そうだよね、女の子たるもおしゃれくらいしたいよね」

イズナがうんうんとうなずく。ドヤ顔がなんかハラ立つな。それもあるが、第一に目のやり場に困るといふのがあるのだが。

「私はどちらでもいいのですが…寒くなければいいですし」

「おなかへったな〜…」

「恥じらいとかって教えるの難しいよなあ…リンは頭はいいが感情

論に関しては無知に近い。ミコトは論外」

「かなづき！おまえわたしばかにしたな！！」

「またなんか壊したら勉強量3倍に増やすからな。というわけでこいつらの服作るのに必要な素材を集めたいと思います拍手！！」

ヒューヒューパチパチ…↑ラジオとかでよく使われてるあれ

「ナイス効果音ロージさん。忍びねえな」

「気にするな、かまわんよ？」キリッ

「なるほど、そっちの手もあつたか…どっちが攻めだろミコト？」

「どうだろ？どっちもどっちだよな…」

「付いていけそうにありません…その二人は絶対に違うと思います」

「欲しい素材は獣神雷毛、天使殻、その他云々…だ。とつとと作りたいから早めに取って来いよ」

コウキが手元のメモを読み上げながら言う。前回同様メンテナンスの女の子が作ってくれるようだ。

「他人事だからって呑気な…」

「いきましたよ。今回はロージさんと小生、加えてリンとミコトで食事兼服の素材回収任務だ。各自勝手にくたばらないように」

「がんばってねお兄ちゃん!! 帰ってきたら私が身体中隅から隅まで愛でて慰めてあげる」

「いんら…もとい、いらん…!」

「上手い下手の問題じゃないけど上手いことなってるなww」

ここが俺の帰るべき場所のような気がしてきた。

コイツだけは護ると決めた（後書き）

次はマキリさんルートです。彼と出会うのは話題になったあの…あ、やべ放送時間g…

## 真龍とマキリ（前書き）

今回はマキリが主人公です。コイツも小生の友人です。実際の彼はここまで壊れてはいませんよ？w w w

## 真龍とマキリ

今回は俺が語り部だ。まあなんつーか…めんどくせえ。あらましくらいは言っておくか。俺は現在不死身のアラガミと恐れられたハンニバルの討伐に単体で挑んでる。今じゃ対策されてふつーのアラガミと同然だ。

あんの野郎殴るだけ殴ってエサ喰いに行きやがって……何とか頭は壊したが…あの機動力は今までのアラガミを軽く凌駕してやがる。まあ慣れてくればそんなことはねえけど。

さてと…今なら喰えるかな?!

プレデターモードに変形した制御ユニットがハンニバルの身体の一部を喰いちぎる。ククク、苦しんでやがるな。ざまあ。おっと、怒らせちゃったかあ?

ボディブロー二発をかいぐり、箆手を狙う。

「インパルスエッジ、氷爆!」

圧縮された冷気の爆発がハンニバルの箒手のオラクル細胞結合を破壊していく。

基本的にショートブレード使いの俺だが、最近はロングブレードを使うことの多くなった。

「ガアアアア！」

「ぐふっ！？」

箒手でなぎ払うように殴ってきたやつが。鳩尾に入った。壁に叩きつけられた。肺から空気が抜ける。くっそ、前から後ろから強い衝撃なんざガチで洒落になんねえ…こういうときは

……困ったときのスタングレネード。ホント、こいつには何度も命を救われた。へへ、また借りができまいったか……スタングレネードよ。呼吸が落ち着くと水平切りをしながら一気に接近する。

「くたばれやあ！」

一撃、二撃。一撃目で箒手が壊れ、二撃目で足を切り、転倒させる。

「オラオラオラオラオラオラ！」

切る切る切るkill。やべ、逆鱗まで壊しちゃった。高熱を纏った炎の輪がハンニバルの背中に具現化する。あれがくるよなあ……ゆっくりと起き出したハンニバルは紅蓮の炎に包まれ、宙に浮く。ホラ、やっぱりきた。あれ喰らうとシールドが溶けそうになるんだよなあ……でも防御しないと上手に焼かれちゃうわけだし……

「グガアアアアアアアア！」

バアルの恵み、灼熱の炎を四方八方に炸裂させるハンニバルの必殺技。くそつ、こんなところで消し炭になんかごめんだ！

「おおおおおおお！」

何とか耐えた。あぶねえ。服の端が若干焦げ臭い。今度はこっちの番だっ！

きりもみ水平切りでハンニバルの周りをぐるぐる回るように切り続ける。もう一度転倒した。神機を銃形態に変える。ファランクス・戦艦すら沈めることができるガトリング砲。

「地獄で肉でも焼いてろよ。死ね」

俺特製の改造バレットを射出する。銃口の前に光の玉が発生し、そこからめまぐるしい勢いで氷結弾が連射される。sonだけで終らねえぞ、更に追加で放つ。結合崩壊し、モロくなったハンニバルの顔面にこれでもかというくらいに氷結弾が打ち込まれる。

我ながらエゲつない。そしてハンニバルは崩れ落ちるように、死んだ。

「ふう……やばかった」

再びプレデターモードで捕食し、素材とコアの回収。

「真竜軟鉄×3……何かの嫌がらせなのか！ ったく……」

散々な一日だった。帰ってエロゲして発散しよう。死体に背を向け、帰島準備に入る。怖気がした。後ろで高熱の炎が燃え出したのが解った。ウソだろ？ こいつへの対策は万全だった、まさか……宙に浮

かんだハンニバルが再び息を吹き返した。

「オオオオオオオ……」

「チ、糞が！」

再び戦闘体制に入る。しかし……宙に浮いたハンニバルの外骨格が崩れていく。そして胸の中心から少女が転がり落ちた。そのまま少女は眠っているような表情で動かなくなった。その他のカスは溶けるようにして雲散していった。

「……目の前で擬人化しやがった。んで、こいつ生きてンのかな？」

指でつついて見ると寝言をほざいた。ムニヤムニヤとか……いつの時代になってもこの音は眠っている証として使われているな……そんなモンなんだろうが。

「おいーっす、首尾はどうだマキリ？」

もうコウキはお出迎えキャラとして定着しつつあるな……なんてことを思いながらヘリに乗り込む。あの元ハンニバルの少女を背負って。

「まさかその娘…」

「ご明察の通り、ハンニバルだ。」

やれやれ、若干だが俺にも妙なツキが回ってきたようだ。

「はあ〜ん…これで二件目か。アラガミ擬人化現象」

こいつは神無月。ヘンな名前だ。冷静を装ってはいるが意外とアホで血の氣が多い。

「とりあえず連れてきた。なんか…ほっとけなくて…」

「アホか。こいつはまだ擬人化したてで、ミコトみたいにそれなり

のモラルやなんやらをまだ知らないんだろっ？ということとは元のアラガミよろしく襲い掛かってくるんじゃないか？」

「「あ」「

「このバカ共があゝ！」

「ん……」

「「「あ…やばいかも…」「」

改めて少女の外見を観察する俺。パツと見変態？細けえことは気にすんな。セミロングくらいの灰色の髪の毛、卵のように白い肌。おとなしいというよりは無口な不思議ちゃんっぽい雰囲気、右腕にはハンニバルの名残が、筆手が付いている。そして……服を着てはいなかった。

「ブハアッ?!」

神無月が鼻血吹いて倒れる。生で見るのはコイツにとってはかなり刺激的すぎたようだ。そこへ…

「またお兄ちゃんたちだけでなにして…」

ヤバイ。この状況での女性の登場はヤバイ。ほっぺに大きな紅葉が出来るフラグだ

「この変態紳士どもがあゝ！」ドバチコーーン！！

「フゲゴポアアアアア？！」

一瞬変態クマの顔が思い浮かんだ。あれと同列扱いされちゃった…

「んで、この娘が元ハンニバル？これで擬人化現象3例目だね」

カーテンで仕切った小部屋の中で少女に服を着せながらイツナは言う。服についてはミコトの服を作る際にデータを採取済みなので服作りは事もなく進んだ。人間の服はどうもお気に召さないみたいだ。

ちなみにミコトの現在の服は黒のタンクトップにダメージジーンズを模した服、リンは巫女服に似たような格好だ。両方ともアラガミ由来の素材で作られてる。今回はその応用だ。

この娘が着るの服は上はノースリーブ、下はミニスカートにスパッツである。どちらも純白というにふさわしい白さ。どうものアラガミの少女達は動きやすさをとってか薄着を選ぶ傾向がある。

「また新しいアラガミ来たのか？」

活発な少女を思わせるミコトが入ってきた。もう発する言葉に漢字が混じり始めてやがる。感情表現もだいぶ豊かになった。もう俺たちより賢いんじゃない？

「お前、なんて名前だ？」

「なまえ？」

「また名前、考えなきゃならねえのか。今回はマキリが決めれば？」

「……エンカ…でどうだろ？炎に華やかな華」

「「「まともな意見が出た？！どうしたマキリ熱でもあるんじゃないか？」」」

「ひでえ。さすがの俺も傷ついた」

複数人数で攻められるのはかなりつらいものがある。

「そつだ、マキリは捻じ曲がってるところがあるけど一応いいやつだから、かわいそつだ、よしよし」

無意識に罵倒してくるミコト。純粹ってコワい。

「時にミコトよ」

「なに？」

「アラガミだったころの記憶ってのはあるのか？こいつを見る限りおそろく…」

「うーん……思い出せない。でもアラガミのころの記憶より今の記憶のほうが大事。だからもうどっちでもいいっておもうようになったかも」

「さりげなく嬉しいこと言ってくれるな」

「お兄ちゃん…？」

「落ち着けイヅナ！わかったこうしよう、後で二人でアラガミ討伐に行くぞ！」

「やった〜」

イヅナとミコトの間に火花が散っているように思ったのは俺だけではないはず。ともあれ…

「これからよろしくな、エンカ」

「……………ファイ」

ふいとそっぽを向く。やべえ、絡みづれえ…二人つきりになると必然的に気まずくなるみたいな雰囲気バンバンだ。いいだろう、なにが何でも攻略してやろうじゃねえか！

「神無月、マキリからやばそうな雰囲気が漂ってくるんだが…」

「イズナ、ミコト、見ちゃいけませんですよ」

「「?」」

「ここも狭くなったなあ……このままお前らが無尽蔵に擬人化個体を連れてくるようならフェンリルの連中がいやでもかぎつけるだろうな」

「わかってる。それはここにいるやつら全員わかっていることだ。でもやっぱぼつとけねえ」

「だったらさ、どっかにこいつら専用の居住区を作っちゃえばいいんじゃない?」

「やっぱ馬鹿だ」

「激しくほつとけ！」

「（否定しないのか）」

「……待てよ？確か……」

突然ターミナルを開くコウキ。

「んゝあった、これだ、極東地区未開拓エリアのマップ」

「聞いたことがあるな、そのエリアはGPS上では確認が取れるが人が行くにはあまりにも不毛なところだろ？」

「そうだ。だがこいつらはアラガミだ。何の問題もないだろ？」

「考え方がエゲツないな……」

「じゃあまた探しておくよ。お前らが新しい個体を連れてくる前にな？」

言葉一つ一つに棘を感じる…そのうちお前もわかる 때가来そうだがな。

それからコウキがおあつらえ向きの未開拓地を探している間エンカは俺が責任を持って教育することになった。何日か過ごして色々わかってきた。基本的に気まぐれで、虚ろな瞳は何を見るわけでもなくただ宙を見つめていることが多い。

まさに不思議ちゃんだ。ちょっと目を放した隙にどこかへ出かけてしまうこともしょっちゅう。やれやれ。だが見つけてやるとどうも気分がいらいしく、帰りのへりの中で鼻歌を歌っていたりする。無表情だが、彼女なりの感情表現なのだろう。

どうしよう。こんなシリアスなところでこのセリフを言っではいけないような気がしたが…

萌える。可愛過ぎる。攻略するつもりが、俺が攻略されているような気がしないでもない今日この頃。



## 真龍とマキリ（後書き）

ロージさんとリンはディナーデートの真っ最中ですww

## 今夜は魚料理

「エンカ、食事に行くぞ」

「……今日は何」

「グボログボロ。今回は普通のやつと墮天種2体だ。豪華なディナーだろ？」

「……そう」

「今夜は焼き魚定食だ！ちゃんと火を通すんだぞ！」

「………クス……」

笑った…笑ったよ？もしかしてこいつはエンカルート開拓成功って事か？！うつひょーい！↑もちろん心の叫び

「………（笑ってる………なんか、胸の奥がむずむずする………なんだろう…？）」

「（甘酸っぱいなあ…ガンバレ！二人とも！）」

「？」

グボログボロ。

大き過ぎるヒレと頭を持つ、鰐のようなアラガミ。  
砲塔のような突起物から、水球を複数発射してくる。

胴体の大きな胸ビレと、肥大化した頭部及び口が特徴。ミッション名では、ワニと表記される事が多い。  
見た目に反して陸地での移動も速く、水中をケモノ道として利用することも。

由来はアフリカのルグバラ族の神話に出て来る神、グボログボロと思われる。

引用・G O D E A T E R B U R S T @ W i k i

極端に肥大化した大きなヒレ、頭にそびえる砲塔、ジョー。顔負けのものすごい牙。グボログボロは魚のような形をしたアラガミである。体内の水を圧縮して頭の砲塔から発射したり、大きなヒレを使ってかなりのスピードで這いずってきたりする。強面の顔が迫ってくるので何度戦っても慣れない。だって顔が怖いもん。さすがに3匹は大変なので神無月とミコトに同行をお願いした。

「やれやれ、俺魚より肉派なんだがナア…」

「そう？この時期グボロ、脂乗ってておいしいよ？かなづき」

「ミコト、俺たちはアラガミは喰えないんだよ…？」

神無月の装備は尾剣ウラ真、氷と火という相反する属性を備えたロングブレードである。対して俺の装備は超電磁ナイフ、強力な雷属性を備えるショートブレードである。エンカの武器は…素手？

「違う。これ」

なんだ籠手か。ん？それってやっぱり素手に等しいんじゃない？

「いいかエンカ、倒したら一緒に食べるぞ！そんでエンカの炎で焼いてこう言っ……」

「じょーずに焼けました〜？」

…楽しそうだなあ…。

男なら 一度は味わう この孤独 マキリ・神無月、心の一句。

「ギシャアアアア！」

「うわっ、生臭っ！ということはお出やがったな」

「わかりやすいなその反応！いやまてそれ以前に鳴き声でわかるだろ！」

ビチビチ這いずってくるグボログボロ。ちなみに普通のグボロでは

なく、灼熱のマグマの中で進化したグボログボロ墮天種だ。普通と違って赤く、放蕩から吐き出される砲弾はマグマ仕様となっている。当たらなければどうということはないのだg…

「ぐはああ?!」

轢かれました。心得その一、戦場で漫才はしないほうがいい。

「轢かれた…」

「轢かれたね…」

「呑気に見てないで手伝え！」

「行くよかなづき！」

「でりやあああ…」

神無月がかく乱し、ミコトがスキを見つけてタメ切りを喰らわせる。敵がミコトのほうを向くと今度は神無月が威力の高いバレットをぶつけ、自分のほうに気をひかせる。見事な連携だ。神無月は基本的に連携が上手い。無論、一人でも強いのだが。

「こつちだバカ魚！」

「ギシャア…?!」

「よそ見は禁物だ！喰らえ！」

ミコトの一撃がグボログボロの背びれを結合崩壊させる。

「まだまだ終わらないぞ！内臓破壊弾・雷ノ型！」

ヒットしたところから大型のバレットを連続して打ち出す、おそろくもつともポピュラーな改造バレット。一発目さえ当てれば後は自動的にダメージを蓄積してくれる。それを弱点である尾びれに15発。ゴッドイーターの戦いはシビアなのだ。

その時…もうひとつの鳴き声。

「チイ、お客さんが増えやがったか！」

俺は超電磁ナイフを携え、現れたジョー・もどきを食い殺しに向かった。新たに現れたのは普通のグボログボロ。冒頭で解説した水を吐き出すタイプのやつである。

「燃えて」

エンカが炎の剣をその手に体現させる。そして廃工場の壁を蹴り出しながら接近、砲塔部分につきたてる。深くまで突き刺し、バックステップで後ろに下がる。悶え苦しむグボログボロ。

「しずめええええ！！！」

神機を變形させ、銃形態に移行。ターゲットカーソルをグボログボロの背びれにロックオンする。解き放たれた雷の弾雨は魚もどきの鱗を突き抜け、体内のオラクル細胞をぶち壊していく。

「グボログボロ・雷撃弾焼きの出来上がりだ」

雷でよく火が通ったグボログボロの丸焼きが完成した。

「そっちは倒したか？マキリ」

「おう、ミディウムレアに仕上げた。神無月夫妻の首尾はどうだ？」

「ダレが夫妻か。ちゃんと食い殺したよ。後は寒冷地対応型のグボ口だな」

## 今夜は魚料理（後書き）

グボログボロがマスコットみたいにかわいいAAがあります。以外にゴッドイーターってAAが充実してるんですよ。

現れた3原色（前書き）

いえ〜い！！もはやここからアラガミとかほとんどカンケー無いぜ  
！！

そんなに睨まないでお願いシマ…

### 現れた3原色

「シイイイイイイ！！」

グボロの氷結弾をガード、次の瞬間にダッシュステップで接近、尾剣・ウラを砲塔の部分に突き刺す神無月。

「ギシャあ？！！」

「脳みそプチ撒ける！！」

突き刺したままインパルスエッジで顔面を爆破する。尾剣・ウラのインパルスエッジは氷結爆発、よって寒冷地適応型のグボロにはほとんど効かない。だが目くらましにはちょうどいいのだ

剣を引き抜かれ、砲塔の部分からどくどく血を流しながら、グボロは目の前に舞い上がる爆風を振り払うように顔を振る。

「ハロー、アンド、バイ！！」

爆風が晴れた瞬間、上空に飛び上がった俺が回転突進刺突で背びれ

を切り裂く。ほうき星のごとく、電撃の青白い軌跡を描きながら俺はグボロをスタスタに切り裂いた

「焼き払う」

エンカの口に急速に熱が収束され、鉄をも溶かすレベルの熱を持った火球が構成される。放たれた火球はすさまじい音を立ててグボロに直撃、オラクル細胞を燃やして溶解させていく。もともと寒冷地対応型なので、熱に弱いその鱗が熱によってゆがみ、ひしゃげていく

「終わらせるよ」

ミコトが剣に力をこめる。その込められた力に呼応し、剣が淡い桃色の光を放つ。素人でもわかる、圧倒的な力を込められたその大剣は目の前の獲物を喰らおうと我慢できずにいるような、そんな雰囲気放っていた

「アメノハバギリ」

斬撃とともに降り注ぐ断罪の光がグボロの内臓器官にまで熱を通す。  
（もはや熱を通すとかいうレベルではないが）断末魔の悲鳴も上げ  
ることは許されず、神の名を持つ魚は無残に辺りに肉片をバラ撒く  
結果となった。

「二人とも手を合わせて！」

「いただきます！」

ミコトは背びれに近い脂の乗った部分を腕の捕食器官で一心不乱に  
食べている。エンカは内臓がお気に入りらしく、グボロのキモを手  
でちぎりながら口に放り込んでいく。ゆっくりとした租借のあと、  
ゆっくり飲み込み、ちよつとニヘラと笑った。とはいってもマキリ  
くらいしか彼女の表情の変化はわからないのだが

「笑った顔もかわいいなあ……」

「今の笑ってたのか？エンカとはそんなに会わないから表情がまったく読めん」

「確かに、出会ったところのエンカは表情一つもんが見受けられなかった。でも最近はよく笑うようになったぜ？ミリ単位だけど」

「小生にはよくわからん……」

「そこまでだその人間とアラビトどもよ」

「「「ん？」「」「」

鉄塔の森、そこはかつて工場地帯だった場所。人間たちの産業活動が盛んだったころとは違い、今はもう役目を果たすこともないであろう工場跡がひっそりと、静寂を守っている場所。その工場の屋根から飛び出た煙突の上から何かの影3つが、こちらを見下ろしてい

た。

「お前しゃべったか？マキリ」

「いんや。二人は？」

「「ちがう」」

「空耳だな。そついや最近空耳ソングって聴かないよなあ」

「マイアヒとかもすかうとかだな。比較的記憶に新しいのはウツー  
ウツーウマウマだな」

「「わかんない」」

「音楽聞かせるつてのも教養になるかなあ…帰ったらクラシックと  
か聞かせてみるか？」

「俺たちも父親っぷりが板についてきたよなww」

八  
八  
八  
八  
八  
八  
八  
八  
八  
⋮

「3連火炎球！！」

ズドオオオオンンンンン！！！！！

「危ないなあ……人がしゃべってるときに邪魔しちゃ行けないってママに教わらなかったのか？」

巨大なタワー・シールド・ユミルで火球をガードしながら神無月が冗談交じりに言葉を放つ。だが表情は永久凍土を思わせるような冷たい、狂気の笑みを浮かべていた。神無月と初めてミツシヨンに行ったときのことかと思い出される。今でこそ丸くなったが、昔はもっと狂気じみてたなあ。かく言う俺も自分のケーニヒスシールドで後ろのエン力を守ったのだが。タワーほど防御力は高くないのでちょっと

痛かった。

「われらが同士を殺されて、いきり立たないのもおかしかろう」

さつき火球を放ってきたやつ隣のやつがしゃべりだした。こいつがリーダー格か？

「我等が同士を迎えに来たのだ。アラビトはアラビトと共に行くのが一番良策だ」

徹底して無感情な、冷たい言動だ。なんか聞いてて腹が立つ

「エンカとミコトはもうこちらの身内だ。渡すわけないな。というよりお前らのようなやつのはアラビトと呼ぶのか。何一つわからんが、お前らのネーミングセンスは皆無だということはわかった」

「てんめえ殺す!!」

「ちよつとは落ち着きなさいよ……」

どの生物も赤いやつは熱血漢のようである。それにしても、赤、青、  
黄ねえ…どこの特撮だよwww

それにしても俺たち、余裕である

### 現れた3原色（後書き）

擬人化固体にもいろいろ居るんですねえ…小生が書いててなんだけ  
どww

あー次の話は特に戦闘はありません。多分。

あ、刀馬鹿さんがロージを存分にいじめてやってとか言ってたし、  
丁度いいやwwいじめてやるとしましょうか（修羅場的な意味で）

## ロージアムの憂鬱（前書き）

お世話になってマース、ロージさんの話です。ロージさんイジメです。  
（修羅場的な意味で）

次話はもっと悪化させるつもりですww

## ロージアムの憂鬱

「今日は顔合わせに來ただけだ。彼女らはいずれわれらの同士として貴様ら人間を滅ぼしてくれよう」

青いやつがミコトとエンカを指差しこう続けた。

「人間と共存できる、そんな夢物語のような考えは捨てるべきだ。我々はいつでも待っているぞ？」

「ガトリングバースト!!」

ミコトの大剣の剣先から大量の神属性の弾丸が3人に向かって放たれた。あまりの威力に煙突が粉々になってしまった。文字通り、跡形も無い。

「馬鹿な私でもわかる、あんたたちキライ」

煙が晴れたときには3人の姿はなかった。おそらく逃げたのだろう。

「わたしずっとマキリと一緒に。あいつらについていけない」

「エンカ……… 大丈夫だ、俺もずっとそばにいるからな」

エンカが俯きながらマキリの袖をつかむ。相変わらず無表情のようだが、マキリはその表情の変化を見逃さない。マキリが優しく頭をなでていた。ええなあ、こういうシチュエーション。ちらちらミコトが神無月のほうを見ている。

「大丈夫だ、ミコトも連れてなんか行かせねえよ」

乱暴にワシャワシャとミコトの頭をなでる神無月。されるがままのミコト。こんな日常が続いてほしいと誰もが願うはずだ。だが運命というものは俺たちに非常な結末しか与えてはくれない。今の幸せをかみ締めることしか、俺たちにはできないのだ。それでも。ほんの少しでも、護ることが許されるのなら。俺は護り通してみせる。

バッドエンドなんぞ、俺が、俺たちが喰い殺してやる。

雨が降りしきる嘆きの平原に、ロージとリンはいた。彼らの目の前にはサリエルの死体が転がっている。生物にとって至福の時間、食事の時間だ。

「ちゃんと毒粉は避けるよ？飯食って腹壊すのも癪だからな」

「はい、マスター」

いつからだろうか、彼女は俺を呼ぶときにマスターと呼ぶようになった。悪い気はしないが。そのとき、俺の携帯がけたたましい音で鳴り出す。マナーモードにしかないとかないとなあ…戦場でこれはまずいよなあ…

「ん？」

「どうされましたか？マスター」

「…………やれやれ、リン。まだ戦えるか？」

「もちろんです」

「アラガミ討伐の追加ミッションだそうだ。お相手は…ヴィーナス」

ヴィーナス。

妖しくも美しい女体の下に恐ろしくも醜悪な巨体を従える異形のアラガミ。

下部にある複数のゼリー体には他種のアラガミが取り込まれており、その能力を駆使して戦闘を行なう。

その起源については「一体のサリエルが美しさを求めすぎたあまり、捕喰を繰り返して美しさとはかけ離れた存在になった」

との噂もあるが、真偽の程は定かではない。

名前の由来はローマ神話の美と愛の女神、ウェヌス。（ヴィーナスはウェヌスの英語読み）

引用・GODEATER WIKI

「世知辛いねえ… 人員不足が深刻化してきてるな… あの糸目マッド  
サイエンティスト、もうちょい性根入れて頑張ったほうがいいんじ  
やねえか？」

「… 上官には上官なりのジレンマがあるのだと思います。仕方な  
いことですよ」

「頭では判ってるんだがな。愚痴らずにはいられないよ」

空を仰ぐように見上げる。降り注ぐ幻滅と憂いの雨が俺の頬を濡ら  
した。

ズズン…ズズン…

「いやがったみたいだな…」

俺とリンたちは物陰に隠れる。足音のする方にゆっくり、そーっと  
顔を出して様子を伺う

そこには美を求めるあまりかえって醜悪な体を手に入れてしまった哀しき美の女神、ヴィーナスが佇んでいた。降ってくる雨でシャワーを浴びているかのように、髪の毛を後ろに流している。上半身は美しき女性だが、下半身は形容しがたいほどエグい。

嘆きの平原の端のほう、水が滴り落ちている場所でヴィーナスは立ち止まり、行水を始めた。そういえば普通のヴィーナスより少し小さい。アラガミの成長なんか知らないが、これも個体差だろうか。

「忍び寄ってチャージクラッシュを喰らわせる。やつが振り向いた瞬間にコールカタクラフトをお見舞いしてやれ」

「了解しました」

偽装フェロモンを呑み、気づかれ難くなった俺はそっと物音を立てないように忍び寄る。

「（そーっとそーっと…）」

そのとき、俺の携帯からけたたましい音で着信音が鳴り出した

電話だぞ！……！！出やがれコノヤロー！！！！（↑以下繰り返し）  
（着信音）

「？」

「しまったああああ！！！！マナーモードにするの忘れてたあああ  
あ！！！！」

「マスタアアアア？！！？」

ヴィーナスが振り向く。あ、目が合った。一瞬のことなのに、永遠とも呼べる時間が過ぎたような気がする。そして。

「ぎゃあああああああ？！？！？！？！？」

「ぎゃあああああああ？！？！？！？！？」

「マスタアアアアアア？！？！？！？！？」

あとの二つの悲鳴は俺とリンだ。じゃあ一番最初のは？考えるまでもない、そこにいたのは俺とリンとヴィーナスだけだ。アラガミが悲鳴？

「うえええええええええん！！！」

前を隠すように、うずくまるような姿勢でヴィーナスが走っていききました。ついでに惹かれました。もとい、轢かれました。

下のグロい下半身置いてきぼりにして。なんというか…きぐるみ脱ぎ捨てるみたいな感じで…あの下半身抜きだと普通の人間だ。赤い髪の毛振り乱しながら、すさまじい速さで走り去っていった。

「……………?????」

「ごほっ…ゴハア…いや、そんな訳が分かりません見たいな目で見られましてもね？俺も訳わかんねえよ？てか、着脱可能だったんだ、下半身」

走り去っていったヴィーナスの上半身の行った方向を見つめながら俺は思う。ホント、アラガミって何なんだと。それになかなか…

「マスター？」

なんかどす黒いオーラが出てますよリンさん？触手がなんか光ってませんか？

「マスターのばかあああ！！」

「ぐべはああああ？！？！」

地下下からの強襲です。顎をとらえられました。スタン状態です。

股間をはずしてくれたことには感謝はしときますけどね？

あえて言わせてもらおう、不幸であると！！（泣）

## 死の猛毒粉

「とりあえず追いかけないことには話は進まないな。追っかけるぞ！」

「ええ…（なんでしょうね、この胸のモヤモヤは…今の私には理解が不能です…）」

二人はあたりを警戒しながら走っていく。確かそっちの方向にいったような…

るー…

遠くのほうから何かの鳴き声がする。おそらく、複数。まったく、最近面倒なことが増えてきたもんだ。

「今の鳴き声…サリエルか？」

「そのようです」

サリエル。

人と蝶が融合したかのような姿をした美しくも不気味なアラガミ。空中を妖しく舞いながら邪眼から放つ様々な光線で攻撃してくる。

サリエルとは、アブラハム宗教の聖典や伝承に登場する神の使い（天使）の内、熾天使や大天使という階級に位置する天使の一人。死を司る天使とされる説に対し、医療に精通しているという全く逆の説もある。

妖艶なその見た目で神機使い達を惑わし、強烈な毒をばら撒いたり追尾式レーザーを額の邪眼から放ち攻撃するアラガミ。女性のような容姿をしているので男にとっては少々戦い辛いアラガミだ。ベテランならともかく、新人がよくこいつの毒粉を喰らって病院に担ぎ込まれるのは珍しいことではない。先ほども戦って倒した相手だ。

ヴィーナスも同じようなものだが、危険度が圧倒的に高いためそうそう相手にできるようなものではない。こちらのほうがよりあからさまなのだが。え？なにがって？

ググレカス

って言ってみたかっただけだ。見てみればドン引くかそれとも、だが。ちなみに第一種接触禁止アラガミ。

「まいったな…多数相手にできるほど俺は余裕はないぞ？」

「見てみましょう」

先ほどと同じように壁から顔だけをそつと出して確認をする。リンの触手の先には感覚器官があり、それが敵を捕らえるとリンが知らせてくれる、言い方は悪いが生きたユーバーセンスである。ちなみにユーバーセンスとは敵の位置を捕捉できる能力のことだ。

俺は前方を、リンは触手を全方位に展開して警戒する。

「いた…あれは…」

そこに確かにヴィーナスはいた。多数のサリエルとともに。数は…3匹か。だが様子がおかしい。これは…いじめられているのか？

「人間と勘違いしてやがんのか？エゲつねー…」

「……………」

ビームを打たれ足をくじかれ、突進で跳ね飛ばされる。地面にたたきつけられバウンドした瞬間に追尾式レーザーが放たれる。スマ。ラのお手玉状態ってこんな感じだったな…これはさすがに可哀想になってくる

るーーー！！

残酷な笑みを浮かべながらヴィーナスをいたぶり続けるサリエル複数。女の虐めってほんとに怖いです

「やめてー！！」

ヴィーナスが悲痛な叫びを上げる……やはり先ほどのものは幻聴ではなかったらしい。元が人型なので擬人化とは言いがたいのかもしれない

れないが…喋れるほど知能が発達しているということは、それに分類できるのだろうか。それにしても…胸糞が悪い光景だ、いじめと  
いうものは

「リン、ちょっと行ってくる」

「え？ます…」

返事は聞かない。こいつらは俺がブチ殺す

「るーるー？」

「はぁ！！！！」

2段ジャンプ、サリエルの顔面をキックで蹴りだし、対角線上にいたサリエルの額の魔眼にアメモムラクモを深々と突き刺す。

「るうううーるー？！？！」

「しいいいいいいい！！！」

剣を逆手に持ち替えて後ろに向かって振り切り、真つ二つにする。二つになったサリエルが地面に落ちる手前、顔面を蹴ったサリエルが毒粉をばら撒く。猛毒が俺の体の中を駆け巡る。体がリアルタイムで蝕まれていくのがわかる。知るか。

「殺殺殺殺殺殺！！らぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！」

同じく2段ジャンプで空中に舞い上がり、片手で神機を持ち、右斜めから左斜め下へ向かって振り下ろし、着地。一体のサリエルの腕とスカートの右部分が地面に落ちる。本体も一緒に落ちてくる。再び神機を両腕で持ち、大きく振りかぶって目の前の頭を切り落とす。

「るうー？！」

仲間が次々一瞬で殺されていくのに驚きを隠せない最後の一体。片手で神機を持ち、サリエルに向かってブン投げる。スカート部分に突き刺さり、痛みには耐え切れずサリエルが落下する。前のめりに墜落したのでより深く神機が突き刺さる。

「…る…」

堕ちた女神は、そのまま動かなくなった。

「ゴフツ……クスリ……」

毒が回りすぎた。手が震える。目がかすむ。解毒剤を落としてしまった。解毒薬を拾おうとしてかかもうとしたそのとき。

「るう——!!!!」

「…………あ……」

倒したはずの最後の一体が苦し紛れに額の邪眼からレーザーを放つ。  
その光線は俺の腹を的確に貫いた。

俺が覚えているのはそこまでだ

## 死の猛毒粉（後書き）

ジャイアン死んじやいやん!!...すみません

折れた刀、折れぬ意思（前書き）

ロージさん復活！！ロージさん復活ッ！！ww

病人なんですけどね

## 折れた刀、折れぬ意思

「ロージさんがやられたって?!」

たった今任務から戻った小生は衝撃の事実をコウキから教えられた。  
まさか…

「ああ。腹をレーザーで貫かれて、おまけに猛毒をくらってる。助かるかどうかはわからないそうだ」

「……クソが…ロージさんが死んだらリンに顔向けできねえじゃねえか…」

「大変だったよ。リンが俺への直通回線を開いたときはかなり驚いた。リンがいる状態で普通の救助依頼を出すわけにもいくまい」

「毎度毎度悪いな…容態はどうなってるんだ?」

「止血は終わったようだ。後は体にどれだけ毒が回ってるか…」

「リンは?」

「俺の研究室にいる。ミコトが慰めてくれてるようだ。共犯のやつらにも連絡は取っておいたから後で医務室に行ってみよう」

「ああ…」

なぜだろうか。こんなにも胸が痛い。人間が死ぬ話はよく聞く。そのたびに皆がいやそうな顔をしていた。私にはそんな表情をする理由が解らなかった。今なら解る気がした。

「泣かないで…絶対戻ってくるよ」

ミコトが私の頭をなでる。それがひどくうつとうしく感じた。触手で振り払う

「……………辛いのはあなただけじゃない」

そう一言言ってミコトの隣にいたエンカが部屋から出て行った。ミコトもついていった。なんだろうか、この形容しがたい感情は。そうか、これが辛い、悲しいという感情か

それから私は一人でずっとこの悲しみという感情をかみ締めていた

頭がボーっとする。あれ？俺何やってたんだっけ？……あ、サリエルの野郎…野郎？一応女っぽいし…女郎？…まあいいか、やつに臓物をぶちまけられたんだっけか。おまけに毒まで食らってたか。<sup>ハラワタ</sup>死に掛けてたんだっけ

「目が覚めたか！！ロージさん！よしコウキ！ナースコール連打だ！！」

「了解！！目指せ16連打ああ！！」ポチポチポチポチ…

「お前ら自重しやがれクソツタレどもがああ！！」ギャース！

「病院では静かに」キリッ

「お前ら後で首の上のサッカーボール蹴っ飛ばしてやるからな……」  
ビキビキ

「ボールハトモダチ、ケル、ヨクナイ」

相変わらずのようだ。

「ロージさんの部隊のメンバーは仕事に行ってるそうだ。んで、代わりに暇だった小生たち13部隊が看取りに来たってわけだ」

「縁起でもねえこと言ってるじゃねえぞ神無月…マジでシャレにならねえ…………リンは…？」

マキリがリンゴを果物ナイフでウサギの形に切り始めた。切り終わってからそれを一口サイズに、3等分に切っていく。……ウサギさ

んの意味は？

「かなりショックだったみたいだ。3〜4日ほどロージさん入院してたけど、その間何も食ってない」

「そうか……あ、そうだ」

「」「？」「」

「俺をコウキ君のラボへ移せるか？そこで治療できりゃリンとも会えるし」

「ロージさんマジデレデレwww」

「なっ……おまつ……ぶっ殺すぞバ神無月！！」／／／／／

あゝに手をあててコウキは思案する

「うっん…できる」

「」「できるのかよ?!」「」

「俺の辞書に不可能と自業自得という文字はない!!」

「なんて自分勝手な辞書なの?!」

「自分勝手という文字もない!!じゃあ早速改造してくる」

「『行動早っ!!』」

コウキが出て行ってすぐ、コウキのラボのほうから凄まじい騒音が響き始めた。マジで行動が早い

「隠密カップルってのも大変だなあ、お前ら」

「『お前もだろ』」

自嘲気味に3人は笑いあう。漢<sup>オトコ</sup>たるもの、護ると決めたやつに涙は流させない。漢<sup>オトコ</sup>に許された特権である

歯車が、今噛み合い、動き出す

コウキが神妙な面持ちで告げる

「ロージさん、あんた歩けなくなってるよ」

「……え？」

あれからロージはコウキのラボで療養生活を送っていた。前述のとおりコウキは化学者、アラガミ性の毒やキズなどにも精通している。最近のコウキは任務に行かず病院施設にこもりつきりで薬を開発し

ているということも多々ある。ぶっちゃけこっちのほうで報酬が  
いので最近転職しようかと悩んでいるコウキである

余談だが、今までの回復錠は味がまっただけでなかった。任務に出て  
いたコウキが「せめて味くらい付けようぜ！」と思い立ち、帰等後  
即開発。今ではイチゴやチョコなどフレーバーが30種類ほど存在  
している。

シリ阿斯に戻る。

「サリエルのレーザーが腹を貫通しただろう？そのとき下半身を動  
かす命令を飛ばすはずだった脊髄が蒸発しちゃってる。ロージノア  
ムにならんかったのは奇跡とだっていい。さらに拳句に猛毒だ。早  
めの処置がなければ内臓まで壊死してた。今は何とか落ち着いたけ  
ど…応急処置してくれてたリンに感謝しときなよ？当分刺激物は食  
えないな。カレーとか」

「俺はもう…歩けない？あとカレーが食えない…」

ゴッドイーター退役…カレー禁止…戦うことが生きがだった俺

…任務後に海に遊びに行つてグボロに水弾当てられてぶっ飛ばされたり、山に遊びに行つてハガンコンゴウに殴り飛ばされてぶっ飛ばされたり、それはそれは楽しい（？）時間だった。それも、終焉を迎える

「可能性はあります」

リンがいつの間にかそこにいた。あまり聞かれたくはない話題だったので人払いはおいたはずなのだが…

「私の触手の一部をマスターに代わりの神経として植えつけるのです。今しがたマスターの適性検査のデータを見ました。マスターの神機はどうやらウロヴォロスのコアで作られているようです」

「なるほど。確かに神機使いのオラクル細胞はコアのオラクル細胞を培養して作られたものだ。俺の化学者としての初仕事だったな…オラクル細胞培養は…と、話が逸れたな…ふむ…初めての試みだ。というか危険すぎる賭けだ」

「やる」

「即答かよ。まあ待て、アラガミが一緒だったからって必ずしも適合する訳じゃない、さらに言うならロージさんが自身のオラクル細胞に捕食される可能性だってあるわけだ。アラガミ化してしまうことだってありうる…」

「それでもやるんだ。俺がそう望むから」

「はゝあこの人は…ま、努力はしてみるか。リンとロージさんの細胞が適合するかどうか検査する。手術はそれからだ…やれやれ、まったく忌々しい…マーナガラム計画を思い出したよ。いろいろシュミレーションするから時間をくれ。何しろ初めてのことだ…最低でも2週間はほしい。専用の偏食因子も開発しなければならぬかもしれないな…あゝ頭が痛い」

「悪いな……俺は生きてるうちはずっと戦わなきゃいけないんだ。それが俺のやるべきことだから。2週間待つだけでいいんなら喜んで待つよ」

「マスター…」

手術は2週間後である

「今日はお兄ちゃんが忙しいから代わりに私がミコトちゃんとエンカちゃんのご飯係だよ！」

「今日は何食べに行くの？」

「どきどき」

「今日はねえ…ディアウスピター！」

「「おお〜」」

ディアウスピター。

ヴァジュラの接触禁忌種。漆黒の身体と邪悪な顔を持つ新種のアラガミで、ストーリーにおいて因縁の敵となる。雷撃による猛攻と鉄壁の守りを誇り、正に帝王の名を冠するに相応しいアラガミと言える。

ヴァジュラと似た攻撃が多いが、全体的に隙が減り、攻撃の範囲は拡大されたうえで持続時間が延長されている。  
また、プリティヴィ・マータと同じく活性化時には全身が硬化する。ただし結合崩壊した部分は硬化しない。

名前の由来はインド神話の古き天空神デヤウス（別名「父なるデヤウス」を意味するデヤウス・ピター）から。

引用・GODEATER WIKI

「じゃあ今日もおなかいっぱいになって帰ろ」

「「おお」」

運命というものはどうしてこうも皮肉なのだろうか。神無月、ローシラム、マキリ。

青年たちの運命が、今ここに、動き出そうとしている

## それぞれの戦場、散る鮮血（前書き）

さて、作者のヘツタクソなバトル描写全開な19話目、はーじまーるよーww

## それぞれの戦場、散る鮮血

「くそつたれがあー！！くたばりやがれ！！クロノサイズの血さびにしてくれるわー！！クケカクケコココー！！」

「まあとおめてえオダブツウー！！フウーハハハハあー！！」

ハガンコンゴウ4体が入り乱れる中、神無月とマキリは戦っていた。神無月が切り伏せ、マキリが撃ち抜く。かと思えば神無月がバレットを乱射し、マキリがズタズタに切り裂く。

二人のあまりの勢いにハガンコンゴウたちもたじろいでいる。この二人は「アラガミに恐怖を与えるもの達」という異名も持っている。

「デメエの間抜けなツラ粉々にしてやるぜ！！ほらよおインパルスエッジー！！」

神属性の爆発がハガンコンゴウの顔面を大いに傷つける。傷口は抉<sup>えく</sup>るもの。それが神無月のドSロジックである。鎮魂の廃寺一帯の雪がどんだん血の色に染まっていく

キレた一体のハガンコンゴウが雷を纏いながらローリング突撃する。

神無月がすばやく反応、ユミルを展開し正面から受け止める。

「おおおおおおお！！！！！」

数メートル後ずさった後、ハガンコンゴウの攻撃は完全に攻撃性を失った。そして神無月はシールドを強く押し、コンゴウの拳を押し返した。よもや受け止められると思っていなかったハガンコンゴウは一度バックステップで距離をとろうとする。後ろに影。

「逃がすわきゃねえだろ」

マキリがジャンプでコンゴウの背中に乗り、後頭部に銃口を向ける。そのままバレットがコンゴウの頭を打ち抜いた。

「ぶっ？！なにすんだマキリ！！正面の小生が血でずぶ濡れじゃねえか！！！」

「失礼、わざとだ」

「わざとかよ？！あゝ血生臭せえ……」

言っておくがこの二人がいる場所は戦場、そして今現在進行形で戦闘中なのである。

「さあゝて…冗談はさておき」

「おい、小生に血をぶっかけたことは冗談のレベルなのか？」

「ぶっかけか…クク…」

「おい、それ以上はやめてくれ」

まあこの様子からミッションの成功については問題ないだろう。

ところ変わってここはエイジス島

「こんのおー!!」

ここはエイジス島。かつてある男が世界の終末を起こし、世界を再創造しようとした計画の残骸。崩壊したその島には瓦礫の山とアラガミの温床と化している。そこで戦う3人の少女

一人は拳に炎を、一人はその体に似合わぬ大剣を、一人は赤い禍々しい雰囲気を持つ剣を振り回して戦っている。3人を囲むようにしてアラガミたちが押し寄せてきた

「くっ…さすがにまずいかも…」

ディアウスピター一体の討伐任務のはずだった。だが、実戦ではそんな都合のいいことはそうそうは起こってはくれない。最近アラガミが活発化してきているのだろうか、ここ最近乱入ミッションが急激に増加している。彼女たちも今まさにそんな状況なのだ。

お相手は、ディアウスピターの群れである。その数多数

「劫火球」

エンカの口に熱エネルギーが収束され、一気に放たれた。それは正面にいたディアウスの顔を著しく傷つける。悲鳴を上げる帝王。だが相手は一体ではない。横からもう一体の帝王が突進し、エンカを弾き飛ばす

「つあああああ？！」

「「エンカ（ちゃん）！！！」」

「こんのおおお！！！！！」

あまりの勢いに吹き飛ばされるエンカ。激しく地面に打ち付けられた。ミコトが怒りに任せ大剣をブン投げ、それは突進した帝王の肩に深々と突き刺さる

ゴガアアアアア？！！？！

ダウンする帝王。捕食を試みようとミコトがダッシュで迫る。だが、

多勢に無勢。エイジス島の外部からまた新たな帝王が顔を出し、雷弾をめまぐるしいスピードで、連続して放つ。吹き飛ばされるミコト

## 絶 体 絶 命

「（このままじゃみんな死んじゃう…ここは逃げる！！）」

先ほどの雷弾で気絶したミコトを背負い、イツナはスタングレネードを炸裂させる

「エンカちゃん！！逃げるよ！！」

コクリと頷いて返事をするエンカ。再びエンカの口に熱が収束され、その火球は最初に討伐した帝王の死体を燃やす。流れ出た血が一気に蒸発しあたりを赤黒い煙で包んだ。

「はぁ…はぁ…ぐっ…」

「……………大丈夫？」

「うん、平気平気！…この先のアナグラに通じるとこまで行けば大丈夫だよ」

3人はエイジス島から脱出を試みる。だがそこは絶海の孤島。人間がそう簡単に来れる位置ではない。ここに来たときはアナグラの地下通路を利用してきた。

「もうすぐだからね…」

「うん…」

イズナの背中の子ミコトがつめき声を上げる。

「気がついたかな？……………あぁ……………」

イヅナの目に飛び込んできたのは衝撃で崩れた元地下通路。退路を絶たれてしまった

「…大丈夫、私が崩す」

エンカが瓦礫に歩み寄り、持ち上げてどかし始めた。さすがはアラガミ、大きな瓦礫も簡単に持ち上げどかししていく

グガアアアアア！！！！

先ほど通ってきた道のほうから帝王の鳴き声。早くしないと嗅ぎつけられてしまう

「ここもまずいね、早いとどこかしちゃわないと…」

「私も手伝…うぐっ…おなかすいた…」

エンカを手伝おうと瓦礫に歩み寄ろうとしたミコトがうめき声を上げる。見ると足から血が出ている

「（早いところみんなに通信入れたかったけど…さっきのディアウスピターの電撃のせいでジャミングが発生してる…ほんとにマズイ…）」

「どかせた、早く!!」

エンカが瓦礫をどかし終わったそのとき、上からオウガテイルが降ってきた、というか落ちてきた

ギシャアツアアア!!!!

次の瞬間エンカは吹き飛ばされ、通路の中へと飛ばされた。それがイズナの放ったインパルスエッジだとエンカが気づくまえに入り口は崩壊した

失われた片割れ

ぞくり

「?!……なんだ？」

「どおした死神」

今背筋を伝った言いようのない怖気。帰投中のへりの中、神無月は目を覚ました。アラガミの中でも比較的厄介なハガンコンゴウ4体の討伐任務だったのだ、疲れが出て当然である。

「……いや……瞬イヅナが苦しんでるような感じがして……いや……なんでもない」

「それってあれか、二〇―タイプみたいな……キュピリリン!……つてあれか？」

「……さあな」

心に鬱蒼とした分厚い雲がかかったような感触…神無月の恐怖は現実のものとなる

「たゞだいま…ん？」

エントランスにエレベーターが着き、誰が出迎えてくれるわけでもないがとりあえず帰投をしめすあいさつ。いつもなら大抵返事が来るのだが、（新人や教官などが多い）今回は違った。二人の経験上、こういう返事が返ってこないときは何かよくないことが起こったときである。返事をする余裕が皆からなくなるからだ

「ああ…神無月！マキリ！よかった！おい！！コウキを呼べ！13部隊全員召集しろ！！」

久しぶりの登場の刹那が何かあわてている。これはいよいよ危ないことになったらしい。あの刹那が慌てているのだから

「待て…何が起こった？」

刹那が言いあぐねている。なぜだろうか。その先の言葉を聞くのが、小生には先ほどのミッションを遂行することよりも数十倍怖かった。

「イズナちゃんとミコトちゃんが……行方不明です……イズナちゃんの腕輪の反応も……つい先ほど途絶えました」

コウキのラボ

「どうだ？あれからイズナちゃんたちの消息は？そして神無月の様子はどうか？」

ラボのベッドに寝たきりのロージが、ベッドに頭をもたせ掛けて寝ているリンの頭を撫でながらマキリに尋ねる。ロージが頭を撫でるたび、リンの触手がピクンと動く。ちくしょうリア充め大爆発しろ。

「大分ヤバイ。あいつがあの一以来、長期休暇取るなんて今までなかったことだ。食堂にも姿を見せない。あいつに飯を作るスキル

はなかったはずだが…ともかく、腕輪の反応が途絶えたということ  
は…生存は絶望的だろう」

「炒め物…チャーハンとかコッコードーぐらいはできるだろうが…芳  
しくないな…13部隊だけでは彼女らの搜索は手が回るまい？俺の  
所属部隊のやつにも声をかけておいた。死神兄妹がそろっていないく  
なるなんて極東地区始まって以来の大惨事だ。他のゴッドイーター  
の士気が下がらなきゃいいんだが……」

「クックドゥーな、ロージさん。エンカの調子もすこぶる悪いんだ  
…責任感じてんのか、出会ったばかりのころみたいに目が虚ろな  
んだよ…」

「（正直違いがわからないっていったら多分今度こそロージノアム  
になるんだろうなあ…）」

「今日は何すっかなあ……コッコードー切らしてる…炒め物シリーズ  
もねえ…買いに行くか…よろずや開いてるといいけど…」

声のトーンが普段より3割り増しくらい低い。覇気というものが感じられない。生きる気力を失った死人のごとく、神無月の足取りは重かった。小生の、神無月のたった一人の家族。両親は小生の目の前で噛み砕かれ、殺され、そのアラガミの餌となった。

それから数年後、小生はゴッドイーターになり復讐を遂げた。それからアラガミを、殺して殺して殺し続けた。心と体が壊れていくのを自分でも感じていた。そんな中小生の耳に届いたのが、たった一人の家族がゴッドイーターになったということ。狂気の淵をさまよいつづけていた小生を救ってくれた唯一の光。イツナがいなければ今の自分はなかった。

その護りたい光が、今はもういない。泣くことなんて忘れた。ただただ無気力が体を支配する

「…そういや今日で休暇最後か。次何ミッション請けようか…」

ビーー！ビーー！…！

神無月の部屋に警告を表すアラートが鳴り響く。ドアを内側に引こうとしてこれは引き戸だったことを思い出した。だいばやバイな、  
小生

「よう神無月、いい加減チャイムの音変えてくれよ、隣の部屋の奴がまたびつくりするだろ？」

コウキがドアの前にいた。手にビニール袋を持っている

「コウキか。慰みなんざいらねえぞ。あとチャイムを変えたきや支部長に言え、この部屋改造したの、あのおっさんだから」

「いや、こないだ貸してもらった「ときどき」！あらがみ審判！」を返しに來ただけなんだが」

「おい！」

「へえ、確かそれって…ライトなエロゲーだったんじゃないかなあ？R15の。あとギャルゲー要素もあつたような…」

マキリに見られました。オワタorz

「まあいい、お前とはダチだしな、貸してほしいモノがあれば貸すのもやぶさかじゃねえぞ？最初はライトにデモン。インとかどうよ？今日からお前も極東支部エロゲー同盟の一員だ！」

「やかましい！！勝手にヘンな同盟に入れるんじゃない？！興味ねえよ！！」

「（今の間は何だよ今の間は）」

いい友人を持ったと思う。心の底からそう思った

「今日たった今、愚者の空母で赤い刀身をつけられた、神機を持った陰が目撃されている」

「！！」

「出撃記録を見ても今日愚者の空母に行ったのはそれを目撃したチームだけだ。さらにイヅナちゃんがミコトたちの飯を食べさせに行ったところはエイジス島。愚者の空母に程近い場所だ」

コウキが不敵に眼鏡を押し上げながらいう。

「最近研究職ばっかで体がなまってるんだ。軽い運動ってことで愚者の空母のオウガテイル掃滅ミッションを受注しようと思うのだが、誰か手伝ってくれるやつはいないものか…」

「小生も…俺も連れて行ってくれ」

## 死神の過去（前書き）

今回は会話が少ないです。一人語りのな。

## 死神の過去

「いい?!ここに隠れているのよ!」

「お父さんたちが戻るまでじっとして、声を出しちゃいけないよ?できるね?」

「うん!」

無邪気に兄妹は答えた。黒髪の兄と紺髪の妹。そのときの両親二人の表情はもう覚えていない。逆光で見えなくなっている感じた。僕たちはなぜこんなことをしているのか理解する間もなく、何処か暗い狭い場所の中でうずくまっていたと思う。妹はお母さんからもらったというお守りをずっと握り締めていた。

そして。光がさした。お父さんとお母さんが帰ってきた!喜んで僕たちはそのドアを勢いよく開けた。地獄への扉を。

目の前にいたのは橙色の凶暴な目。官能的と言いがたい、真っ白

な女性の上半身。ザイゴートがそこにいた。俺たちを喰いちぎろうと大口を開けて突進してきた。

とつさに横によける。そしてドアを押し開け、妹の手を強く握り逃げ出した。横に転がる肉片に気づかないようにしながら。向こうのほうで何か爆発音。ザイゴートがそれに気を取られている間に俺たちは逃げ出した。

突然のことで妹はしばし茫然としていたが、少し時間が経って事の重大さに気づいたらしい。

男というものは、もしくは生物というものは護るべきものがそばにいるときには、強がる傾向がある。草食動物の悪あがきで肉食動物を撃退してしまうといったことがTVで流されていたのを覚えている。僕だって泣きたかった。だが泣けば脆い妹が壊れてしまうような気がして、泣けなかった。

逃げて、逃げて、逃げ続けて。足がもげるかと思うくらい走って。そして俺たちはどこかのスラムのようなところに紛れ込んだ。人はいない。変わりに体の一部や鮮血が辺りに散乱していた。そこに隠れて助けを待とう。小さかった僕たちができることはそれだけだった。

かるうじて残っていた食料で食いつなぎながら俺たちは助けを待った。来るかどうかわからない助けを待つことはとても怖い。妹を

抱きしめて慰め、勇気付けながら僕はわずかな可能性を信じていた。  
そしてこの世に神などいないことを思い知る。

ズズン…ズズン…

明らかに人の足音でないそれはまっすぐ俺たちが隠れている廃屋へと歩み寄ってきた。

べきべきと屋根がはがされ、青い竜が俺たちを見下ろした。力任せに壁を壊し、僕たちを捕食しようとする手を伸ばしてきた。

小生が覚えているのはそこまでだ。

気がついたときには小生はアナグラの医務室のベッドに寝ていた。隣のベッドにイズナがいて、すやすやと寝息を立てている。隣の診察室のようなところから声が漏れ聞こえてきた。

「本当に何が起こったって言うんだ…」

「俺たちがこの子達を発見したときにはカリギュラは死体になっていた。今日の出撃記録を見返してもこの地域に出動した部隊は俺たちだけだった。それならだれがカリギュラを殺したってんだ…？」

「えげつない死にかたしてたよなあ…探査にもほかのアラガミは引つかかっていない。共食いの線も薄い…不思議なこともあるもんだ…まあ尊い人命を二人も助けられたんだし、いいんじゃないか？」

この人たちは何を話しているのだろうか。子供だった小生には理解できなかったが、ひとつだけ雰囲気理解していたこと。この人たちはあいつらをやつつけられる。強さが欲しい。ベッドから起き上がり小生はすべてを決めた。

数年後。小生は神を喰い殺す者として戦っていた。

「おい新人！！後は雑魚だけだ。片付けとけよ！」

「……………」

「何だその目は？！新人は黙って言うこと聞いてりゃいいんだよ！俺は先にへりで帰るからな！！」

殺した。殺した。満たされない思いをずっと抱えながら、アラガミを切り伏せ、打ち抜き、殺戮した。その日は小生が今の姿になった日だった。こういう物語を知っているだろうか。とある人物が生きたまま棺桶に入れられ、恐怖のあまり髪が真っ白に変色したと。

先ほどの先輩がへりに乗り込もうとした瞬間だった。辺りに大きなほえ声が響く。先輩が恐れている。へりのエンジン音で聞こえなかったが、発進を急かしているようだった。早く脱出したいという気持ちが見え見えだ。あろうことかそのままへりを発進させる。小生はただただその光景をばーっとみていた。

空に浮かび上がったへりが撃墜されたのがその数秒後である。

「うぐ…なに見てんだ新人！！とつとと俺を助ける！！」

小生は駆け寄ろうとした。だがその間に大きな影が降り立つ。今となつては雑魚同然になつたが当時の小生には強敵だつた存在。ヴァジュラが大きな吼え声を上げた

## 死神の覚醒（前書き）

短いです。ちょうど一区切りにしたかったので。短いです。大切なことなので2回言いました。みじry

## 死神の覚醒

「ひ…ひいい!!」

あまりの恐怖に先輩が悲鳴を上げる。キジも鳴かずば撃たれまい。悲鳴を聞いたヴァジユラは先輩のほうへとゆっくり振り向く。

涎をたらしながら捕食しようと迫るが、後ろからなにやらうざったい物をぶつけてくるものがある。それを片付けてからでも食事は遅くはないだろう。振り向き、そのうざったいものへと照準を合わせる。頭の周りに生えた鬣たがみにも見える帯状の期間に電気エネルギーが収束されていく。次の瞬間それは巨大な雷弾としてその者へと飛んでいった。

「くがあああああ?!」

銃形態で攻撃していたので防御シールドの展開が間に合わず、吹き飛ばされる。体中に鋭い痛みが走り、筋肉が自分の意思に反して痙攣する。動くこともままならず、ただただ小生は目の前で起こっていることを見ることしかできなかった。

直撃だ。うなり声を上げて敵対象が戦闘不能になったことを判断したヴァジュラはヘリの下敷きになっている獲物のほうへと向き直る。そして大きな口をあけて…燃え上がる金属ごとタンパク質の塊を捕食し始めた

タンパク質の塊の、丁度潰れた足の部分を捕食し終わったところだろうか。ズズ、という物を引きずるような音。先ほどの獲物がダメージから復帰したのだろうか。だが今はそんなにおなかには減ってはいない。十分に満たされている。立ち去ろうとした瞬間右前足の辺りに激痛が走る。

見ると自分の右前足が数メートル先にぼとりと音を立てて着地したところだった。切り取られた前足の切断面から大量の鮮血が流れ出る。そうしてできた赤い湖の真ん中に、白い髪の毛をしたもの（・・）がいた

右腕にはいつも人間が持っているあの武器がある。左腕には自分が生きてきて始めて見るものを持っていた。純白という言葉さえおこがましいほど真っ白な、大きな鎌。その刃の部分には自分のものと思しき血液が付着している。

ヴァジュラは後悔した。この生き物を最初に殺さなかったことを。ヴァジュラは飛び掛った。捕食のためではなく、自己保存本能に従い、目の前の捕食者を妥当するために。だがそれは徒労に終わる。

それは右腕の武器を地面に突き刺し、固定した。そして開いた右手をこちらにかざす。そのまま片手で突進を受け止めた。ほとんどその場から動かずに。

ヴァジュラは大いに驚いていた。右前足がないとはいえ自分の全力の突進だったのだから。顔面をアイアンクローの要領でメキメキと握り潰される。まさか、素手でアラガミの顔面を結合崩壊させる人間がいるとは思っても見なかっただろう。悲鳴を上げるまもなくそのまま後ろに投げ飛ばされた。仰向けに地面にたたきつけられる。次の瞬間目の前には真っ白の刃が迫っていた。

「おい新人！！新人！！息があるぞ！！とつとと救護班よこさねえか！！」

頬をペシペシたたかれる。意識を取り戻すに最も理にかなった行動だ。だがちよつと痛いです

「こつちはもう駄目ね…見るまでもないわ…しかし、このヴァジュラムすごい死に方ね…ダルマなんてレベルじゃないわ」

確かに、そこにはただの肉塊と貸した元ヴァジュラムの死体があった。小生がやったのか？

この声は…ベテランゴッドイーターの声だ。信頼の置けるこの二人は小生が所属する部隊の部隊長でもある。名前は…後でいいか。考えることすら億劫だ。

「おい、後でつて言うからにはちゃんと紹介しろよ？…それよりお前、その髪…」

「真っ白ね…」

そのころまだ普通の一般人だったイヅナの反応が忘れられない。

「きゃー！かつこいい！白髪紺眼！！ねえ抱いて抱いてry」

他の人たちは小生をなにか恐ろしいものでも見るような目で見てきたが、こいつだけは違った。本当に、イヅナに救われたと思う。思えばこのときだったか。たった一人の家族を、小生は何があっても守り抜くと誓ったのは。

「おーい、起きろ神無月！……神無月？」

「…おう、いや、ちよつと寝てたわ」

「頼むぜ死神？」

正面に座っていたコウキが茶化すようにいう。やれやれ、そろそろ任務開始だ。まだまだ、まだ終わったわけではない。確認を得るまでは、終われない。

## 科学者ではなく化学者（前書き）

タイトルからしてコウキさんが目立ちます。  
…多分

## 科学者ではなく化学者

3人の周りをぐるりと囲むオウガテイル。涎をたらし、目の前に現れた新鮮な肉を捕食しようという気が見え見えである。獣は本能に従順。だがそいつらは知らなかった。目の前のものが自分たちを捕食する存在でもあるということ。

「ちえいさあああ！！！！」

「おらああああ！！！！！」

「回復弾だ！」

散る鮮血、飛び散る肉片、ばらばらになっていく仲間。自分の隣にいた奴の片足が、そいつらの出す大きな口に喰いちぎられたとき、逃げを決めた。

「どっせええええいいい！！！！！」

「おどりやあああああああ！！」

「回復弾だ！！」

キガツキヤハラノナカ。

「「お前も戦え！！」」

「ん？」

非戦闘員として長かったせいかコウキの武装はとても弱い。神無月とマキリの武器ランクが10に対してコウキはランク4なのである。

「いや〜やっぱ俺戦うのって向いてないかもなww」

「お前なあ…まあいい、オウガテイルの掃射ミッションは終わった、先に戻ってていいぞ」

「なあ〜に水臭せえこと言ってんだドカスが」

マキリが力をこめて神無月の背中をぶつ叩く。痛みに顔をしかめる神無月だが、その表情には負の感情は見受けられなかった。

「人間ってのは一人じゃ何もできねえ。一人がだめなら数で押せばいい。とつととイズナちゃん連れて帰って神無月夫妻の拳式の準備すんぞ」

「ふっ…そうだなっておい!!」

「「あはははははは!!!!」」

ヒュゴツ

ガツキイイイーーーーン!!!!

先ほどの和やかな雰囲気が消滅した。何かがすさまじい勢いで3人向かって突進、その衝撃波で辺りに土ぼこりが舞う

「げほっ…なんだ?！」

金属と金属が擦れあう耳障りな音。強いて言うなら鋸迫り合いのときにでる音のようだ。土ぼこりが晴れたとき、マキリとコウキはその何かが神無月と対峙しているのを目撃した。それは、かつてともに戦った仲間の容姿によく似ていた

「コロス殺すころすk o r o s u!!!!」

やり場のない憎悪を神無月にぶつけるようにその少女は紅蓮色の刀剣を振り回す。その一太刀一太刀が大地を抉り、大気を切り裂く。神無月はそれを刀身で受け流し、無力化する。

「イツナ?! イツナなのか?!」

「あああああああああ!!!!!!」

容赦なく攻撃をしてくるそれ。神無月の展開しているタワーシールドにさえひびが入りそうだ。だが神無月は攻撃することができない。それは自らの妹と世話の焼ける娘のような存在が混じり合った姿だったから。肩甲骨まで伸びた桃色の長髪に紺髪が混じり、その目は深紅の左目と紺碧の右目になっている。

「リユリユリユ…狂化薬は大成功ダネ」

空に浮かぶ紫色の影。ぱつと見貴婦人のようだがその意地汚くも汚らしい表情からその類でない。むしろもっと下衆いた雰囲気を見せている。

「サリエル堕天種か?!」

擬人化現象に慣れたからこそその冷静な分析。ふつうドレス着た紫色

の貴婦人が宙に浮いてたら誰だってビビる。意地汚い表情を浮かべながらその貴婦人は微笑んだ

前に記述したとおり墮天種は通常の個体よりもタチが悪く、面倒な個体が多い。サリエル系の墮天種はその猛毒に磨きがかかり、毒性の上昇、毒粉の散布範囲の広域化というはつきり言ってあまり戦いたくないタイプの敵である

「せいゝかぁゝい。まあそれ知ったところで何がどうするわけじゃないかもだケド」

「イズナちゃんに何しでかしやがった」

マキリが恐ろしい殺気を放ちながら言葉を紡ぐ。表情といったものがなく、ひたすらに殺気だけをあたりの大気に発散させている。仲間意識の強いマキリゆえだろうか。気の弱い人間程度なら発狂させることすらできそうな雰囲気だった。後にコウキは語った

「簡単に言っと、その子面白そうだったからふんじばってとっ捕まえてワタシ特性のお薬の実験台になってもらったっていうわけなんだケドオ。ビックリしちゃうわヨネゝ。その子、人間とアラガミのハイブリッド体らしいノヨ。だからちゃんとお薬効くかどうかかわかんなかったんだケド」

「くたばれ」

マキリとコウキがサリエル墮天を切り殺そうとダッシュジャンプで接近し、一太刀入れようと剣を振り回す。だがユラユラ舞い踊るようにサリエルは回避し、額の邪眼から追尾式レーザーを発射する。二人はシールドを展開、防御する。

「反射神経はさすがってとコロネ」

「俺は化学者だ。化学つてのは人を助けるための、神が与えたもうた学問のひとつだ。決して人を苦しめるためにある学問じゃねえ。今、俺は化学者として、人間として――！貴様のことが心底憎い――！」

「ああら怖いコワイ。ワタシ食べられちゃイソウ」

茶化すようにほざきやがるコイツ。コウキは思った。こいつ、喋れば喋るほど大嫌いになっていく。化学者としての礼節を叩き込んでやらなければいけないと。

「マキリ、こいつは俺に任せてくれ。ちょっとこいつを瓶詰めにして名前書いて研究サンプルにするから」

「フン、やばくなったら加勢させてもらうぜ?」

建物の残骸らしきものに腰掛けるマキリ。それを皮切りに、化学者対マッドサイエンティストの戦いが始まった

「おりゃああああ!!」

コウキの武器はリゴレット。何の皮肉かそれはサリエルの素材を利用して作られた短剣である。強力な神属性を備えており、手数で攻めるタイプのショートソードである。ジャンプ攻撃や取り回しの関係で空中に漂っていることの多いサリエル系にはそれなりに向いている武器といえる。

だがそれは人間より遥かに大きい普通のアラガミに対しての話で、およそ人と大きさが変わらない敵なのだからついていくのがやっとなんて状態だ。小さい分、身軽で速い。正直、ヤバイ。

だったらどうする? 諦める? 否!! 俺にはまだこれがある。化学者として、ゴッドイーターとして戦いに身を投じるために開発してきたケミカルウェポン。秘蔵逸品。コウキは内ポケットに手を突っ込んだ

薬品は危険なものもあります、取り扱いには細心の注意を払いましょう（前書き）

短いです。コウキさん大活躍です。短いけど

薬品は危険なものもあります、取り扱いには細心の注意を払いましょう

コウキの武器はリゴレット。何の皮肉かそれはサリエルの素材を利用して作られた短剣である。強力な神属性を備えており、手数で攻めるタイプのショートソードである。ジャンプ攻撃や取り回しの関係で空中に漂っていることの多いサリエル系にはそれなりに向いている武器といえる。

だがそれは普通のアラガミに対しての話でおよそ人と大きさが変わらない敵なのだからついていくのがやつとといった状態だ。正直、ヤバイ。なので化学者らしい戦いをすることにする。内ポケットから秘蔵ノ一品のひとつを取り出し、神機にリロードする。メンテナンスの女の子とつるんでいろいろいじくった甲斐があった。レーザーを避け、隙を突いて神機を銃撃形態に変形、照準を合わせぶっ放す

ポウン！

「?!」

「スタングレネード弾だ！」  
バレット

手榴弾にホールド効果を含んだ粉塵を配合させる。ダメージは少ないが、足止めには十分すぎる効果がある。バレットをいじくるより

こっちの方が即効性が高く、何よりも自分らしいからという理由だ。決してバレットをいじくるのが苦手だめんどくさいというのが理由ではない

本当ならゴッドイーターも食らうはずだが、コウキは違う。あらかじめ抗体をつくり、自らの体に投与しておいたので平気なのだ。コウキだけが平気な証拠に、岩に座っていたマキリがホールド状態になっている。風向きが悪かったようだ

「いつか殺す……」

マキリが独り言をつぶやいた

「リュ……このくらいで……！」

「対アラガミ用刺激性物質？……！」

コウキが内ポケットから試験管を取り出し、サリエル墮天に投げつけた。それはサリエルの皮膚に着弾と同時に急激に気化し、サリエルを包んだ

「いやああああ？……！！？　痛iiiiiiiiiiii！！！！」

「オラクル細胞結合を弛緩させる薬品だ、アラガミの痛覚を刺激しさらに防御まで下げ、挙句生態電流の通達まで遅らせることのできる優れものだ。ただ高価で量産形態は確立されそうにないな」

ジャンプし、動きの鈍ったサリエルを滅多切り。地面に叩き落とし、止めを刺そうとした。

次の瞬間

薬品は危険なものもあります、取り扱いには細心の注意を払いましょう（後書き）  
マジで短いですね。アニメ化されたら5分と持たないでしょうwww  
次はターニングポイントになるので一区切りしたかったです。つぎは普通だと思います

生き続けることは悪。

岩に座って事の成り行きを見ていた俺ことマキリ。何が起こってる？コウキとサリエル墮天も驚いて神無月のほうを見ている。神無月の背中から棘が生えていた。

美しい曲線を描いたその棘は左右合わせて8本。まるで白骨化した手の骨が背中から生えているようだ。その棘の間に薄い膜が張られ始める。程なくしてそれは翼になった。白夜がそこに存在していた

「……………」

絶叫を上げたその物は、大きく背をそらす。すると体の中心線に沿って9本目の棘が生えてきた。9本目は他のものより細く、繊細だった。それを引き抜く神無月。丁度背中に背負った武器を抜刀するような感じだ。引き抜かれた棘は、純白というにもおこがましいほど真っ白な、死神の大鎌デスサイクスに変わった

「かん……なづ、き？」

コウキが呆けたように言う。マキリも普段の細目から一転、カッと目を見開いて驚いている。サリエルの方はあんぐりと口をあけ、酸欠の金魚のように口をパクパクさせている

「「おおおおおおおおおおお！！！！！！」」

一撃。地面が揺れ、空母の一部が崩れて崩落した。二人と一匹が確認できたのは、バラバラになった2つ分の神機らしきものの残骸。

「何が起こってるって言うんだ？！」

「俺にもわかんねえよ!!」

「なんなのヨ……知らない!こんなの知らないヨオオ?!」

「――!!!!!!」

もはや聞こえてくるのは人の声にあらず、獣の発する威嚇の音に近い。黒い獣はどこから取り出した巨大な大剣を振り回している。それに対峙する白い獣は今しがた自分の背中から引き抜いた大鎌を振り回している。最初に持っていた武器は既に壊れて無くなっていた

一太刀、一太刀。一撃ごとに大地は揺れ、空母の一部が海へと墮ちていく。それらはもはや人でなく、神でなく、獣で知らない

「エンカちゃん、ちゃんと帰れたかな……通路が新たに崩れなきやいいけど」

「アラガミはそんなことじゃ死なないよ、イツナ。それより私たち、どうしょっか」

おなか为空いて動けない。いくらアラガミとはいえエネルギー源がなければ動けない。イツナのほうはダメージで動けないみたいだ。服にたくさんの赤黒いシミがついている。きれいな足や腕からも血がドクドクと流れ続けていた

アニメ、とか映画、とかいうやつの中で女の人とかがよく「死にた

くないよ」とか言っているのを思い出した。そっか、このどうしようもなく震えがとまらないのは、そういうことだろうか。何でもいいから食べたい。タバタイタバタイタバタイ……

「私を食べる？ミコトちゃん」

なにを言っているのだろう。あまりのことに理性が戻ってくる。危うく獣のごとく暴走してしまいそうになった自分が信じられなかった。それと同じ、いやそれ以上に衝撃を受けたイズナの言葉。

「実は私もね、さっきの破片が足に刺さって動かせそうにないんだ。血も流れすぎちゃったみたいだし。何かしら食べれば回復するでしょう？私を好物の神機ごと食べて。他のアラガミに食べられるくらいならミコトちゃんに食べられたほうがいいから」

「ふざけないでよ！」

「共倒れよりずっとマシだよ！」

「……」

イズナが怒ったところを初めて見た。今にも泣き出しそうな声と瞳。

「目の前で友達が惨たらしく食い殺されていくのを見たことがあるの?!」

なんて重い一言だろうか。まだ10代にもかかわらず、彼らゴッドイーターは死と隣り合わせの人生を送っている。その一言が彼女の今までを語っていた。

「……………ごめんね、ちょっと言い過ぎちゃったよね……………もう朦朧としてきちゃったから、最後にお願ひ、二つだけいいかな?」

「……………」

「一つ目はこのお守りをお兄ちゃんに渡して」

首からお守りはずしてそれを手渡す。美しい飾り縫いをされたお守りは、所々イヅナの血で少し汚れていた

「もうひとつ、これが最後のお願い」

ガアアアアアアアア！！！！！

「！！！！」

漆黒の帝王が私たちに向かって吼え声を上げた。私たちのところに来るまでおよそ20秒足らず。

「早く！！」

「うわああああ！！！！！！」

これでいいんだ。伝えたいことは伝えたし。さよなら、私の最愛の  
お兄ちゃん。

## はじめ（前書き）

お久しぶりです。これが毎回あげるときの挨拶になりそうで怖い。  
r z

お待たせいたしました、続編です。めまぐるしくシーンが変わるけどがんばってついてきてね！！

## けじめ

いまだに戦いは続いていた。黒い獣の持つ剣の先からすさまじい勢いで淡い桃色の弾丸が雨のように白い獣へと襲い掛かる。

白い獣は翼で弾丸を弾き飛ばす。その弾丸の一発が黒い獣に直撃する。予期せずはじき返されたことでひるむ様子を見せる黒い獣。

「終わりだ」

白い獣が一瞬のスキに接近、背中の棘で黒い獣の四肢を貫いた。そのまま壁にたたきつけ、さながら礫はりつけの様な状態になる黒い獣

「?!」

「大丈夫だ。お前は、お前らは、俺が護る」

白い獣は大きな口をあけ、黒い獣の首筋に喰らいつく。

「オゴツ…っが…」

苦しそうに呻く黒い獣。じたばたともがいていたが、次第に瞼がゆつくりと閉じられていく。そして完全に脱力した。白い獣は？み付きをやめ、棘を抜き、抱きかかえるようにして黒い獣を受け止める。今にも泣きそうな表情で

「問おう。お前は俺たちの仲間か？それとも敵か？さらに問う。貴様は何だ？」

神機をこちらに突きつけてマキリが問う。白い獣はニヤリと笑う。傲岸な、そして不遜で、妖しい微笑み。

「小生の名は神無月。フェンリル極東支部第13課所属、階級中佐。  
白と黒の死神兄妹ジョーカーの片割れ、白い死神だ」

マキリがフツと殺気を引っ込め、ニヤリと笑いながら神機を収め、手を差し伸べる

「お帰り、死神」

「ただいま、エロゲーマー」

「みんな！！無事だったか？！」

ロージさんがリンの押す車椅子でこちらに来た。畜生リア充めもげて大爆発してそれからそれから……

「それより早くラボに行こう。エンカが待ってる。ついでにお前らの治療だ」

「小生たちの治療は二の次か？結構重症だぞ」

背中から生えた棘で体を支え、背中には黒い少女。その上ぼろぼろ。酷い目に会うときはそれなりの理由があるってことだ。なんか悪いことしたっけ、そう思わないでもない神無月だった

「そっぴやサリエルの野郎……もとい、女郎は？」

涼しい顔でマキリが問う。せめて肩くらい貸してくれませんかね、つか貸して貸しやがれ貸してくださいの三段活用！！

「どっか逃げた。だが大丈夫だ、こんなこともあるうかと滅多切りにしていたときに発信機をつけておいた」

「抜け目ねーな、マッドサイエンティスト」

「そう褒めてくれるな」

「いーーやーーだーー！ー！」

「おら！ーとつとと検査されやがれ！ー」

「だったらその机に置いてあるヘンな薬液の入ったビンとか大量の注射針とかどっかやつてもらえませんかねえ？！小生を実験台にする気か？！」

「そうだ！ー！」

「肯定しやがったーー！ー！」

今現在小生は執拗なるコウキの追撃から必死に逃げ隠れている。  
まだ死にたくないし。薬漬けはごめんだ

「小生よりイツナだ！あいつは大丈夫なのか？もしイツナになんかあったらこの極東支部全滅させちやるからな！！」

「いちいちシヤレになってねえ！！大丈夫だよ！今容態は安定してきて後は意識が戻るのを待ただけだから！！あとお前今解ったけどものすごいシスコンだな！！」

「ならいい」

急に止まったのでコウキが小生に激突して数メートル後ろに吹っ飛ばされた。どうなってんだろ、小生の体

「つてて……これはあくまで予測だが、おそらくお前の体の細胞はすべてオラクル細胞に変化してる。

簡単に言えば神無月もミコトたちと同じような存在になったってことだ。何で今まで解らなかったのか……今までちゃんと健康診断とか受けてたのか？神無月？」

「……………ウケテタヨ」

「逃げてたな」

「逃げてない！！逃げちゃダメだって中学生でも言ってただろうが！！なぜか都合よく検査当日に限ってミッションが入ったり体調不良だったりするんだ！！」

「ちよつと前に１９歳になった男の発言なのか？」

調子が戻ってきたようである

おかえり

頭がボーっとする。何もかもがグラグラ動いていて、安定していないような感触が体中を支配している。

「イツナ……ミコト……」

暖かい声が私の耳に届く。聞き慣れた、優しくて、愛おしい声が。同時に私の手を、大きな暖かい手が包み込む。小さいころ、泣いている私をよく引っ張ってくれた、強くて大きな手。

私たちはゆっくりと目を開けた

「目が覚めたか。おはよう、イツナ。おはよう、ミコト」

「おはよう、かなづきお兄ちゃん」

「つまり……どういうことだっばよ？神無月」

「私は……イツナ・ミコト。二人の意思を継ぎし者。なんちゃって」

「そういうことだ」

「いやわかんないよ?!」

だいぶ混乱している様子のコウキ。それはそうだろう。異例の出来事ばかりで頭が追いついていないのだ。小生も若干頭の回転が追いついてはいないのだが。そのとき、コウキのラボの扉が開く音がした

「イツナちゃん!! うぐ…うえええええ~~~~!!」

医療品研究室の扉がスライドし、エンカがマキリにつれられて入ってきた。イヅナを見るやいなや号泣しだしたエンカ。一人で逃げて、二人を置き去りにしたことがよほど辛かったのだらう。安堵からか、その場でへたり込んで動かなくなってしまった

「ほらほら、よしよし。目が覚めたのか、イヅナちゃん」

エンカの肩を持ち、頭を撫で、体を支えながらマキリが話しかける

「うん。ちょっと体がだるいけど、大丈夫」

「要するにミコトちゃんがイヅナちゃんを捕食、そしてイヅナちゃんの特徴がミコトに色濃く現れたってことか」

「そういうことになるかな。今の私は半分イヅナで半分ミコトってこと。記憶も二人分頭の中にあるよ」

お茶をすすりながらイヅナミコトは笑う。偏食傾向まで変化したよ  
うだ。どんどん人間に近いように進化している

「まあイヅナちゃんのほうは……解決したといってもいいだろう。  
だが神無月、お前のことは何一つわかつちやいないぞ。やっぱ人体  
実験……もとい、健康診断して……」

「却下。小生だってわかんねえよ。両親は一般人だったし、実はア  
ラガミの血統でしたっていう設定もない」

「それについては私が説明できるかも」

なにやら神妙な面持ちで語りだすイヅナ

「かなづきお兄ちゃんは……私が7歳のころ、私と両親の元へや  
ってきた置き去りの子だったの」

「私たちの両親はとても優しい人たちだった。ある時私たちの住む居住区一帯の対アラガミ防壁が破られちゃったときがあつてね。居住区内にアラガミが侵攻してきた時があつたんだ。」

そのときお兄ちゃんがザイゴートに危うく食べられそうになってたのをお父さんが見つけた。お父さんがザイゴートの気をひきつけてお母さんがお兄ちゃんを保護した。お父さんも食べられそうになつたんだけど、そのときゴッドイーターたちが間に合つて事なきを得たの。」

「お父さんもお母さんもお兄ちゃんの両親を必死で探したけど見つからなくて……ならいつそ家族としてお兄ちゃんを迎えようつてことになつて、お兄ちゃんは私たちの家族になつた。」

「紛らわしいなあ……んで？それが何と関係があるつてんだ。」

「余計な茶々を入れるんじゃないやねえよコウキ。黙つて聞いてる。続けて。」

「ありがとマキリさん。私たちが始めて極東支部に来た時のこと

だった。詳しくは第21話「死神の過去」をご覧ください」

「メタい発言はやめい」

「それで私、あの時若干だけど意識があつたの。私が見たのは、大きな白い鎌を振り回してカリギュラと戦ってるお兄ちゃんの姿だった」

「そのときのお兄ちゃん、とても悲しそうな顔をしてた。今にも泣いちゃいそうな目でカリギュラを見据えながら。たぶんお兄ちゃんは最初からアラガミだったんだよ」

「そうか……そうだったのか」

俺は何をしていたのだろう。妹にこんな大きなものを背負わせておいて。義理とはいえ兄として失格だ

「そうか。義理の兄妹だったのか。それなんてエロg…（ガスッ）  
…いってえ?!」

「シリアスなときに余計なことほざくんじゃねえぞエロゲーマー？  
！」

「でもいいじゃないか。血のつながりがないならイツナちゃんとの  
結婚は合法だぞ?…いや、あったとしてもそれはそれで……」

「こつから先は深夜2時以降指定、もしくは18以下禁止指定だア  
!…露骨なエロ表現禁止ってなア!…」バキィ!…

「へぶつ?!やりやがったな若白髪!…」

ぎゃーぎゃー!…

「相変わらずでよかった。ただいま、お兄ちゃん。ただいま、みんな」



再誕する、神を断つ大剣（前書き）

ぎょーぎょーしいタイトルですがバトルはありません。いつもどおりダラダラやります

## 再誕する、神を断つ大剣

「いよいよだ。気分はどうだ？」

「ああ。悪くねえ。良くもねえけど」

極東支部以来の大手術。人間の体細胞にオラクル細胞を結合させ、中枢神経を繋ぐ、ある意味訳の分からない無茶手術。このせいで最近出番がなかったロージさん。不憫である

いよいよだ。しゅじゅちゅ当日である。……失礼、モノローグで囁きました

真っ白なベッドに横たわるロージこと俺。

心配そうな目で俺を見ているリン。

P。Pでギャルゲーやってるマキリ。

背中 of 棘で背中搔きながら板チョコ頬張ってる神無月。

神無月の板チョコ奪い取って「間接キスだ〜」とか言ってるチョコ

をベロベロ舐め倒すイツナ・ミコト。

奪い返して恥ずかしげもなくチョコ齧りだした神無月。

急に顔が真っ赤になってモジモジしだしたイツナ・ミコト。

ちよつと頬に朱がさしてる神無月。

手で顔を覆ってるけど指の間からちらちら二人見てるリン。

ってもうええわ!!!!!!!!!!

大体なにこの局地的ラヴい空間は?!他人がいる前でよくストロベ  
られるなオイ!!!つか全員俺を心配する素振りすら見えねえ!!!

一人はP。Pの画面見てニヤニヤしてるし！！二人は初々しいカットブルみたいなやりとりしてるし！！一人は二人のやり取りチラチラ見ながらこつちを何か期待するような目で見てくるし！！もうなんのこれ？！

「うるさいぞロージ」

馬鹿な？！ジェット。トリムつつこみだと？！あと何気に呼び捨てにしゃがった年上を敬いやがれ。あと今のモノローグは口には出していなかったはずだが……まさか、な

「メンタルは大丈夫そうだな」

今までのやり取り全スルーして話を進めるコウキ。極東のスルースキルは化け物か？！まあいいけど

「とりあえずこの手術終わったらロージさんほつといて……もとい、放置して」

「悪化してるよ若白髪！？」

「冗談です。3割ほど」

「後の7割は何が占めてるんですか?!」

「小生の神機とイヅナの神機、また作ってもらわにや。一応小生たちのことは秘密にしておきたい」

「ここまでスルーされると泣いちゃうよ俺。つかもう泣いてもいいよね答えは聞いちゃいけないし聞いてくれないだらうけど」

あれから二人は自分たちのことを秘密に言った。神無月の神機は謎のアラガミと交戦時、相手に深手を負わせると同時に玉砕、イヅナはまだ行方不明という扱いになっている。

極東のエースがアラガミになっちゃいました。なんて上層部には知られたくない。特にあのマッドサイエンティストには

「そろそろ時間だ、ロージさん、行こうか」

「ああ。行ってくる、リン」

「ロージさん漢字が間違ってるぞ。難しいほうだろう?。」

「どんだけ俺を殺したいの神無月君?! あともうやめて、俺のライフはとづくにゼ」……」

問答無用で手術室に運ばれていったロージさん。ちょっとやりすぎたかな。久しぶりだったもんで、つい

手術室に運ばれていくロージさんを敬礼で見送った小生たち。そして小生たちなりに考察を立てる

「人間に進化したアラガミねえ……しかも既存のアラガミのどの方にも当てはまらないときた。そして……神無月、あの時イズナちゃんに何したんだ?。」

「……そうだな、自分でも実感がわかないが……サリエルの野郎がイズナに何か投薬したといっていたな」

「ああ。おそらくあれは精神的に作用する毒薬のようなものだろう」

「それを吸い出したんだと思う。首筋の動脈から……そうだな、伝説上の生き物の名前を借りるなら……カラドリオスといったところか」

カラドリオス。病人の治療、診察を行うといわれている真っ白な鳥。病人の元にこの鳥を連れてくると、嘴を開け病気を吸い込み、太陽光を浴びて汗とともに病を排出するという。

吸収の仕方は違えど、神無月はイヅナを蝕む毒素を吸い取ったのだ。

「あの時、不思議な感じだった。お兄ちゃんが噛み付いたところから、こう……スウーって悪いものが抜けていくみたい……噛み付かれてるのに、まったく痛くなくて、それに……すごく気持ちよかった」

「お前が助かってくれてよかったよ。あの時は無我夢中だったし。どれにしろたった一人の、俺の大切な家族だから」

「お兄ちゃん……／＼／／／」

「ハイハイ、その辺で自重しとけ。そっぴや少し前に出たグボロの擬人化したやつ、どうなったんだろ」

忘れていた。どうでもいいが、ちなみに作者はちゃんと覚えてた。

「このところアラガミがどんどん擬人化していつてる。急激に進化しているのか……どれにしろ、芳しくない、早めに対策を打つべきだ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9568s/>

---

カミノツガイ

2011年11月22日01時58分発行